

## 連続懇談：第2回

いいだ もも著『〈主体〉の世界遍歴』全3  
巻（藤原書店）をめぐって

第2回「古典古代ギリシア文明とは何であっ  
たかーその文明的位置価」

（2006.6.4 於：藤沢産業センター）

パネラー：近藤節也

リプライ講演：いいだもも

司会：猪野修治

はじめに

猪野修治　みなさん、こんにちは。連続懇談の第 2 回目を始めます。お忙しいところをご参加いただき、ありがとうございました。今日は、ちょっと時間も押し迫っておりますので、私のほうから簡単な話をさせていただきます。

なぜ 4 回連続懇談を催すことになったのか、繰り返しになりますが申し上げます。昨年の 11 月頃に、いいださんから、この『〈主体〉の世界遍歴』を送っていただきました。これまでも、著書を刊行されるたび、そのつど、たくさんの著書をお送りいただいて、叱咤激励を受けてきました。しかし、なにしろ公務やらなにやらの諸事情があり、なかなか読めないでおりました。しかし、今回の本ばかりは例外でして、六〇年間の長きにわたり活動家・思想家の最前線におられる、いいだももさんが、壮大な地球文明史を書いておられることを知り、身震いするような思いをいたしました。わたしも含めた二一世紀の若者たちが、どういうふうな世界観をもって生きていくか、を考えるときに、これまでの地球人類文明史を批判的に総括され、それをもって、現代社会にたいする新しい思想・世界観を構築しよう、というまさに“主体的”な試みに対して深く感銘いたしました。

そこで、わたしは、ぜひとも、懇話会でお話をしていただこうと思いましたが、わたくしのこれまでの体験上、1 回や 2 回の懇談では収まらないだろうと思っていました。その後、江ノ島の「岩本楼」で、地元の人たちによる「出版を祝う会」がございました。90 名近くの参加者があり、わたしも参加させていただきました。そこで、わたしは本書をめぐって 4 回の連続懇談をやりましょう、ということ、その出版記念会の席で、いいさんと参加者に申し上げ、有言実行で始めたわけです。今日はその第 2 回目であります。読めば読むほど深い本だと思います。皆さんもおっしゃっておりますが、「事典」代わりに、あるいは、自らの学問的・思想的な世界観を作るさいのひとつの道標として、この本を参考にし、活用すべきだと思いました。

前回（第 1 回）は、グラムシ研究者の片桐薫さん、美術評論家の針生一郎さんから、コメントをいただきました。そのあと、リブライ講演として、いいさんにお話をさせていただきました。それらの講演内容は全部、記録にとつてありますので、いずれ、この懇談会の記録・報告は『湘南科学史懇話通信』にきちんと掲載する予定であります。

いいさんの長年の同志であります片桐 薫さんからは、グラムシ研究者の立場から、この本に対する忌憚のないご意見をいただきました。まずはじめに、年齢と仕事ということについて語られ、80 歳を過ぎられている、いいさんが、このような実証的でかつ学問的レベルの高い大著を書かれたことに敬意を表されました。それから、歴史と現代の問題を照らし合わせながら、その意味を問われました。とりわけヴィトゲンシュタイン、メルロ・ポンティエー、フッサール、という二〇世紀の代表的な哲学者たちの認識論的展開に対する独自の視点を明確に示されている、ことについての所感を述べられました。さらに、イタリアの思想家ズラッファとドイツの哲学者ヴィトゲンシュタインの関係から質問をされました。片桐さんの真摯な読み込みからのご発言は感銘したしいです。

もう一人の発言者の針生一郎さんは、実に味わいのある独特な話をされまして、前回の懇談会のあとに、多くの参加者の方々から、さまざまな好意的な反応がありました。針生さんは、藤原書店の社長から、いいださんがこの本を3ヶ月で書かれたこととお聞きして非常に驚かれたこと、また、この本がきっかけになって、針生さんご自身がお書きになる本のテーマが決まったこと、などを話されました。それは、1930年代に社会主義者、アナキスト、ユートピアン、オカルティスト、ヌーディスト、フェミニスト、という文学者・芸術家が集まってできた「コロニーの歴史」ということでした。それから、針生さんはいいださんとは同世代で、戦後は、いろいろ一緒にやってこられました。学生時代からのいいださんとの関わりの中から、いくつかのエピソードを紹介され、いかに、いいだももさんが「怪物」であるか、を語られました。

片桐さん、針生さんの貴重なコメントのあと、いいださんにリプライ講演をいただきました。この3巻本がどういう構造になっているかということの説明をいただき、二〇世紀の認識論的世界に対していいださんの独自な見解を改めて示されました。そして、今回は、ギリシアに戻って、「古典古代ギリシア文明とは何であったか」というテーマでお話しいただくことになっております。

さて、今日のパネラーの近藤節也さんをご紹介します。わざわざ東京からご夫妻でお出かけいただきました。ほんとうにありがとうございます。江ノ島の出版記念会のときに、いいださんからいただいたメモに、近藤さんは、この本のすべてをお読みになった最初の完読者である、と紹介されておりました。刊行された早々に、最後までお読みになった方とはどういう方のか、と興味を持ちまして、本日のパネラーにお願いしたいです。近藤さんは東京大学美学美術史学科を卒業後、東映映画(株)に入社され映画監督をされました。その後フランス・フロニユ社の日本会長を務め、現在はアメリカ・イオンド大学の名誉芸術学博士ということです。

パネラーをお願いした直後に、近藤さんから著書『美と芸術のプロムナード』（近代文芸社、2003年）という本を送っていただきまして、丹念に読ませていただきました。いいださんの本との関係から感想を申し上げますと、近藤さんの本には、いいださんの今回の歴大な本のエッセンスのようなものが、各所に書かれておまして、そのところをもう少し深く掘り下げたら、いいださんの大著と同じような大著になるな、と直感しました。今、ご本人に確認いたしましたら、そのとおりだということです。近藤さんの本には芸術、文学、詩、思想などなど、ありとあらゆるものが、びっしり高密度につまっておりますが、基本的スタンスは文学・芸術・思想等々における「美の有様」の問題であるとお察しします。これから小説もお書きになりたいとおっしゃっております。ぜひ、そのへんも合わせてお話を伺えたらと思います。近藤先生、どうぞよろしく願いいたします。長くなりまして恐縮です。

## 〈主体〉をめぐる諸感想

近藤節也

ご紹介いただきました近藤です。ちょっとのどの調子が悪いので、お聞き取りにくいところがあるかもしれませんが、あらかじめお許しいただきたいと思います。

『〈主体〉の世界遍歴（ユリシーズ）』について何かいえ、とのご要望を受けて、本日東京より参上しました。30分、何でもいいから話せということでしたが、どれだけのことが話せるかわかりません。話し方次第で30分は長すぎるもするし、短すぎるともいえるのです。

わたしの日常の周辺ではいいださんのことを、ももさん、もも先生、（大学の）先輩、パチンカー、大殿、などいろいろの名で呼んでいるので、話の中で若干の不統一があるかもしれません。あらかじめご了承ください。また、『〈主体〉の世界遍歴』といちいちいうのは煩雑なので、以下『ユリシーズ』といわせていただきます。

### 1 『ユリシーズ』の瑕疵

2年前、もも先生から「ギリシア」を扱った著述をされているということを知りました。わたし自身かねがね、オリエント文明に関心をもっていたので、それと不可分のものとしての「ギリシア」ができあがるのを楽しみにしていたのですが、昨年末、目の前に現れたのがこの大作でした。

主として文学の領域でいわれることですが、源氏物語、里見八犬伝、大菩薩峠を抜きにすれば、日本人作家には長い作品が少ない。また構成力が乏しい。そのことは、一般的に言って、思惟的であるよりは直感的である、したがってあまり論理行為に適していない日本人の体質にかかわっているようにも思えます。国会議員の下手な議論を聞いていると、その思いを深くします。また、それは肉食よりは菜食を伝統とする日本の食生活にも関係があるでしょう。そうした点で、今回のような巨編をものにしたいいださんの能力はほとんど、わたしなどの日本人に対する通念を超えたもので、汎世界的で、化け物的な巨人とも思えます。

むろん文芸にかぎらず、映画においてもそうですが、ものごとは長いだけが良いわけではない。映画の世界などでは虚しい大作、愚劣な超大作というものがしばしば見受けられます。しかし、『ユリシーズ』には、その内容の精密、高度の知識、その他で、「知のエンサイクロペディア」ともいべき質的充実があります。ただ内容の高さに応じて大衆性からはなれるのはやむを得ないことで、読書の対象としては、いわば高段者向きの著作であることは確かで、ここに書かれていることすべてを理解できる読者を探すのはなかなか難しいと思われま

ところで、およそ何事についても、人が何かを真剣に語る時、その人がどのようなアイデンティティに基づいてものをいっているのか、ということが求められます。いわばその人の身分証明書ともいべきものが必要とされるのです。今、そのことを自分にあてはめて、いささか自己紹介をさせてもらおうと、わたしは本質的には映画監督ですが、作家、評論家であり、また芸術学、人文学にも多少かかわっています。

わたしが今回、『ユリシーズ』について関心を持ち、読ませていただいて驚倒したのは、新左翼の巨星と思われるいいださんの人文学的超人部分でした。その反面、映画監督あるいは作家としての立場からいって、読む者にとって『ユリシーズ』にもしいささかの瑕疵があるとすれば、(わたしは本作品を一個の芸術作品として見たいからというのですが)それは作品構成についての意識不在のような気がします。

およそ、映画でも文学でも、実作にあたってわたしなどが悩むのは、全体の構成や造形と語り口の問題です。起承転結といたり、序破急といたり、それは時に芸術作品における美学上の要請になっていますが、『ユリシーズ』は比較的そうしたものに無関心で、そのことが部分的にもものすごい内容をはらんでいながら、その素晴らしい内容を順序だてて物語り、首尾一貫した概観を、読む者の頭にきちんと残すという結果を招きにくくしているような気がします。わたしは『ユリシーズ』を、単なる知の宝庫としてではなく、「芸術作品」と位置づけたいので、あえてこんなことを言わせてもらいます。

## 2 ギリシアは西欧文明の根幹

ところで、本作品についての出版社の謳い文句の中に、「8000年の人類文明はどこへ行くのか」というのがあります。

グリプトリス人の残した石の記録によれば、人類は恐竜の時代にすでに存在し、高度のテクノロジーを駆使してこれと共棲していたもようですが、今、それはさておいて、公認されている西洋美術史の観点からいえば、今から3万年前のオーリニャック期、2万5000年前のソリュトレ期、1万年前のマドレーヌ期の旧石器時代に、美術行為として現代に残る文化作業が行なわれていますが、その代表とされるフランスのラスコーやスペインのアルタミラの洞窟絵画をもって文明と呼ぶには無理があります。

わが国の場合でも、アシカビ朝、から、ツクリヌシ朝、ヒミイヌシ朝、アメミナカタヌシ朝、タカミムスビ朝、クニトコタチ朝、イザナギ朝、アマテラス朝、オシホミミ朝、ニニギ朝、ホホデミ朝、ウガヤ朝、神倭朝(天の朝)まで8800年の歴史があるとされていますが、真に文明と呼べるものはいつごろからなのか、考証は困難です。

『ユリシーズ』のⅢ巻 1954 頁を読むと、アレクサンダー大王の東方遠征時を境として、1663年プラス5000年または6000年と書かれているのですが、それは中石器時代になります。人類文明発祥地点をどこに置かれているのか、わたしにはよくつかめませんが、同じ箇所ですべて述べられている哲学の出発をギリシアでなくエジプトの神官に求めておられる

のは、わたしには新たな学説でした。

とはいっても、西欧文明の根幹がギリシアにあることは誰にとっても明らかなことで、例えば、ユダヤに発したキリスト教にしても、マタイ、マルコ、ルカなどの、共観福音書のはじめはローマ帝国の第二公用語としてのギリシア語を通じてヨーロッパ全体にひろめられたのです。しかし、そのわりには、ギリシアは意外にわかりにくい。

オリンポスに立てこもり、12 神を束ねて勝手放題な振る舞いをして、それでも神々の長と畏怖されたゼウスはジュピターとして、のちのローマ帝国やモーツァルトの 41 番シンフォニーにも名を残していますが、これは多分ホメロスが書いている、ミュケーナイから先史ギリシア暗黒時代にかけて北方から侵入した鉄器民族の指導者だったのではないか。具体的にいえば、小アジアのコーカサスあたりにいたアーリア人種のケルト人が南下して古代ギリシア人になり、ペラスギ人とも呼ばれました。ゼウスの父とか祖父とかいわれるウラノスやクロノスという名前はのちに述べるフェニキア文明の英雄ですが、それに変わって、後発のゼウスがギリシアを篡奪したのではなかったか。ウラノスやクロノスはギリシアの先文明の英雄ではなかったか、とわたしは思います。

ゼウスは弟の海神ポセイドン（これもフェニキア由来の神で、さらにいえばアトランティス由来の皇帝の名前）、冥界の神ハデスと世界を 3 分割し、自らは雷電を武器として地上世界に君臨しました。その子といわれ、デルフォイ神殿を乗っ取って主祭神におさまった太陽と芸術の神アポロンや、愛と美の女神アフロディテー（ローマ名のヴェニウス）、商売と通信の神で泥棒の神でもあり、今では馬具屋あがりのファッション・ブランドとしてもはやされているヘルメス（これもフェニキア由来で、文字の発明者）、葡萄と酒の神ディオニューソス、大地と穀物の女神デメテルも、オリュンポスのビッグ・ネームです。

特殊な存在として、神に逆らって人間に火を教えたプロメテウスは古代無神論の元祖かもしれません。ゼウスの従兄弟だったともいわれますが、それは嘘で、被征服、先住民族、先文明-フェニキア、さらにいえばアトランティスにさかのぼる超有力者だったのは確かです。かれが人間に教えた「火」は象徴であって、のちの言葉でいえば「レジスタンス」と「実存主義」なのだとわたしは理解しています。

プロメテウスというのはそもそも「先に考える人」という意味で、その弟はエピメテウス（後に考える人）といます。たまたまパンドラという女がプロメテウスのところに行ったとき、かれが留守でエピメテウスと仲良くなってしまった。そのとき、彼女がもっていた箱を無思慮にあけたら、数々の悪徳があつという間に逃げてしまい、あとに残ったのはろまな「希望」だったとはよく知られた話です。

ともあれ、のちに古代無神論の代表者といわれるエピキュロスを先導する、すべての超越者をこの世から追放しようとする無神論をプロメテウス主義といます。カール・マルクスはプロメテウスを借りて「端的に言えば、すべての神々をわたしは憎む」といい、さらに「人間の自己意識を最高の神性とは認めない、すべての地上および天上の神々に対する哲学自身の宣言である」と自己の無神論的立場を著書の序文で述べています。

また、こうした存在とは別にギリシアには特有の英雄像があり、それは例えば、オイディプス、アガメムノン、アキレウス、テセウス、ヘラクレスから、トロイ戦争の英雄で今回のいいださんの著書の主人公オデッセイウス（ラテン語でユリッセウス、英語でユリシーズ）その他があります。

余談ですが、アイルランドの主都ダブリンの1日を「意識の流れ」という近代文学の手法で書いた、ジェームズ・ジョイスの『ユリシーズ』は有名です。そしてわが国の古事記についてもいえることですが、かつて歴史書とされていたホメロスの『オデッセイア』や『イリアス』は古代からの口承伝説を詩的空想と推理で肉づけした古代屈指の文学作品だったといえます。それは『ユリシーズ』に書かれているように、古代海洋民族フェニキアに発したアルファベットのギリシアへの導入のおかげです。

フランス革命以前、デイドロが編纂した百科事典では紀元前2000年頃、サンチョニアソンという人が人類文明の根源的記録である『フェニキア史』を書いていると、3世紀になるとこの書をめぐって、教会の父といわれたエウセビオスとギリシアの哲学者ポルピュリオス（ポリュビウス）の間に真贋論争が起きたりします。ポルピュリオスはのちのモーセ旧約は『フェニキア史』の複写だと主張しました。これはユダヤ教に基礎を置くキリスト教には困ったことですが、この史書のはじめの部分（具合の悪いところ）をエウセビオスが複写しなかったため、古代の真実は永久に不明になりました。エウセビオスは非常に神学には熱心な人だったけれども、ときどきインチキをする。ポルピュリオスのほうは正直な人なので、どうもこの人がいったことのほうが正しいのではないかともしられています。

この文書については、のちにギリシアのヘシオドスやホメロスがこれらを換骨奪胎して自分たちの神々や巨人のギリシア的説話を勝手に作り上げてしまった（ロベール・シャルー）という意見もあります。個人的にはわたしはこの意見に賛成です。

そもそも世界四大文明といわれているものに、エジプト文明、メソポタミア文明、インダス文明、黄河文明などがありますが、文学作品と評価されるもので、ホメロス以前のものとしてこれに匹敵するものは、BC3000年に楔形文字で書かれたメソポタミア神話の英雄叙事詩「ギルガメシュ」とエジプトの「死者の書」しかないのではないのでしょうか。

### 3 現代西欧のあらゆる主題が見出されるギリシア

先史時代、アルカイック時代、古典時代、ヘレニズム期と続くギリシア史でギリシア哲学や芸術文化が最高点に達したのは、紀元前480年、490年と2度のペルシア戦争を、アテネを中心にしたギリシア連合軍が乗り越えてから、ペリクレスを擁したアテネが民主制の頂点に向かった時期でした。

対ペルシア戦争にあっては、マラソンの走者の逸話で知られる第1回ペルシア戦争の英雄王ダレウス、ヘンデルのオペラでも名高いペルシア王クセルクセス、大平洋戦争においてアッツ島で全滅した日本軍の祖形のごとく、300人のスパルタ兵とともにテルモピュライ

峠で玉砕したスパルタ王レオニダス（今その名はチョコレートになっている）、わが幕末の小栗上野介のごとく将来を見据えて平時から海軍力を養い、サラミスでペルシア艦隊を撃破した智謀の英傑、テミストクレスなどが有名です。

小栗上野介という人は、幕末に将来を見越して横須賀の海軍基地の礎をつくった人で、のちに東郷元帥が「日露戦争で勝てたのは小栗上野介のおかげだ」といったという話が残っています。この人は時の徳川幕府一番の英才でしたが、維新に際して粗暴な官軍薩長兵士に斬首されます。同じようにテミストクレスは、平時から海軍力を蓄えてサラミス海戦を戦い抜き、それほどまでに国家と国民に尽くしながら、戦争が終わると貝殻追放であっさり追放されてしまいます。当時のギリシアでは民衆が気に入らない人物を貝殻に名前を書いて投票し、追放してしまうシステムがありました。それでテミストクレスが戦った相手国のペルシアに亡命をすると、それをまたクセルクセスというテミストクレスにさんざんひどい目に遭ったペルシアの王が快く受け入れたという話があります。

また、ギリシアには、実質的に世界哲学の原点ともいえるタレス、ゼノン、バルメニデス、ヘラクレイトス、デモクリトス、エンペドクレス、エピキュロス、ルクレティウスなどの自然哲学者たちや、後世に知識人の原点ともいわれるソフィストたち、哲学の主題を世界解釈から人間実存の解明にもちこんだソクラテス、プラトン、アリストテレスなどの哲学者がおり、そこには唯物論、存在論、無神論、ストア学説、弁証法、原子論、快樂説、唯心論、実存主義、その他、後世西欧哲学が扱ったあらゆる主題が見出されています。

理想主義哲学者で貴族政治を信奉したプラトンについては当然、いいださんはお嫌いなのですが、超越価値を個体に優先させるその哲学はのちに来るキリスト教にとって、神を頂点にこの世界を説明しようとする点で有効で、ローマの神学者アウグスティヌスたちによって採用され、中世キリスト教の基礎的主張になりますが、それをめぐって有名な普遍論争を引き起こします。これを唯名論と実在論の争いといいます。簡単にいうと、この世界にはプラトンの言うように「花の美しい一般」というものがある、という立場[唯名論]に対して、「いやそんなものはない、この世には美しい個々の花があるだけだというのが[実在論]です。それは中世にさんざん論争されたことですが、後に来る実在主義にも関連して、決して結論が出ない論争です。

同じ時期に詩や絵画や彫刻も栄えましたが、何とんでもギリシア悲劇といわれる演劇はアイスキュロス、ソポクレス、エウリピデスの3人に代表され、西欧演劇の祖形を形づくりました。小説という文学形式ははるか後世に属するのですが、20世紀にはカザンザキスの「その男、ゾルバ」「キリスト、最後の試み」があります。最近「ダ・ヴィンチ」という映画がキリスト教会と問題を起こしていますが、カザンザキスはそのアンティ・キリスト的作品によって死後もその墓に糞尿をかけられているといえます。

時代ははなれますが、映画監督ではジュールズ・ダッシン、アンゲロブロスなどがよく知られています。ジュールズ・ダッシンという人、格調の高い作風で、後にハリウッドへ行き、ギリシャ悲劇「フェードル」を創りました。「旅芸人の記録」「アレクサンダー大王」



はアンゲロブロスです。「アレクサンダー大王」は実際の王の話ではなく、革命家を主人公にしたものです。それから、クレオパトラ・ロータという女優が「春のしらべ」というきれいな映画を作った。「突然炎のごとく」（フランス語の原題は「ジュールとジム」）の原作は73歳で処女作を発表したというアンリ・ピエール・ロシェでした。オイディプス主題の「アポロンの地獄」（パゾリーニ）や、「エレクトラ」（ダッシン）もありました。

詩についてはレスボス島の女流詩人サフォーが有名です。「サフォーの死するや、なんぞ早かりき」といわれてその死を悼まれた人ですが、美人といわれていますが実際はそうでもなかったらしい。19世紀フランスの文人ピエール・ルイスは、古代詩の翻訳といって自作の『ビリティスの歌』を発表して、社会を騒然とさせました。ドビュッシーがこれ作曲しています。

余談ですが、芥川龍之介が、ある古文書が読者から贈られてきたということを作品の中で書いたら、その道の専門家たちがその内容に愕然として大騒ぎになったことがあります。それはピエール・ルイスがやっていたことだったのです。芥川龍之介は古典は勿論、フランスや英国の作家をよく読んでいて、「河童」などはアナトール・フランスを踏襲したものです。「ビリティスの歌」はわたしが映画化したいと早くから考えていたものですが、それから二十年くらいたってフランスで誰かが実現しました。

絵画では幾何学文様時代というのが美術史上にあります。ギリシアの陶器画において、はるか後代にピカソが使用した多視点描法の原型とも思われる画法がすでに行なわれています。多視点描法というのは、絵を描くときに普通はひとつの方向から見て描きますが、別の方向から見たものも同時に描くことをいいます。美術史的な説明は抜きで、ギリシア時代にそれがあつた。

このころ詩や音楽はあまり重んじられていなかった。それは、幾何学とか天文学とかの知識にくらべてこれらに理論性が希薄だったとされたのが理由ですが、のちに哲学者のピタゴラスが音楽を、アリストテレスが詩学を理論化したことでその地位が高められ、14～15世紀の西欧ルネッサンスの時代になると「自由学芸」と呼ばれて、絵画も含めて社会全体からハイリー・アプリーシーエイト（高評価）されるようになり、さらにのちには芸術や芸術家というものの社会認知を受けて、18～19世紀に西欧文学、絵画、音楽の全盛を迎えることとなります。

政治上の制度においても、王政、共和制、寡頭政治、僭主制、専制主義、民主主義など、人類が経験したすべての政治制度をすでに経験しています。法曹の世界では弁護士という商売ができたのもギリシアにおいてです。

#### 4 人類文明史のトピックスにあふれた『ユリシーズ』

古代文化国家、都市国家としてそのように最盛を誇ったアテネも、やがて軍事国家スパルタとペロポネソス戦争を起こして敗れて斜陽を迎え、さらに北方マケドニアでアレクサ

ンダー大王が興隆し、その攻撃にカイロネイアの戦いで屈服します。それが紀元前 338 年のことで、それをもって古代ギリシアの生命はつきて、その文化文明は後進のローマ帝国に引き継がれますが、キリスト教がその国教となってからは、キリスト教にとって異端の部分は圧殺されて、12 世紀、アリストテレス哲学が東方アラビアから逆輸入されるまで、初期キリスト教最高の思想家アウグスティヌスの神学が、中世ヨーロッパを支配することになっていきます。

世界歴史の中でかくも燦然とした業績をしたギリシア国家は、あたかもその歴史使命を終えたかのごとく、のちにオスマン帝国の支配下に置かれるのですが、19 世紀半ばになると独立戦争を起こし、成功します。英国の詩人、バイロンが義勇軍に参加したのはこのときです。

ギリシア文明の消長について、いいださんの『ユリシーズ』は比類ない精密さで述べていますが、同時期に先行、平行したエーゲ文明、例えばキクラデス文明、クレタ文明、オリエントにおけるエジプト文明、シュメール、メソポタミア文明にも仔細な筆を運んでいます。英国の学者、エヴァンズが発見したクノッソス宮殿の構築、線文字 A・B や、シュメールの発明になる楔形文字、その他、単に娯楽的にみても面白いトピックスであふれています。余談ですが、もう亡くなりましたが、黛敏郎という音楽家が 24~25 歳のときに「楔形文字」という作品で音楽賞をとり、彼はそれがきっかけで音楽家として認められるようになりました。

わたしは文字のことはぜんぜんわかりませんが、中国にも、ひいては日本にも影響しているのかもしれない。これはいいださんに伺ってみたいと思います。例えば、いまではイスラム教に場を譲ってしまった世界最初の大宗教、ゾロアスター教はニーチェの『アルゾー・シュプラッハ・ツアラトウストラ（ツアラトウストラはかく語りき）』が有名です。また、この宗教の影響は日本にも及んで、今日でも各地に残る火祭りは明らかに拝火教（ゾロアスター教）の名残りです。火炎を負って立つ不動明王の故郷はもちろんですが、聖徳太子を模した法隆寺の救世観音が火炎を背負っているのは、その人の由来を物語って象徴的な事柄です。

マニ教は二元的で、すなわちキリスト教のように世界が単一の神の支配になるものではなく、この世は悪に満ちた苦の世界と見ることでキリスト教とも対立し、直接の関係は証明されていませんが、たぶん 11 世紀の有名な異端カタリ派に影響を与えたと考えられています。グノーシスはギリシア語で「知識」という意味ですが、これも初期キリスト教には二元思想として、つまり神以外の価値を認めるということで、目の上のタンコブ的な異端思想だった。

また、アポロンとディオニューソスといえ、わたしには人間精神における静と動、保守と革新を往復する 2 つの型であって、時代の流行が繰り返すのも、人々の趣味、好尚の変転もみなこの原理に従っているように思われます。すなわち「人類の歴史は秩序と破壊による弁証法的展開」ということになりませんが、これらが神であり、人でもあった存在の

由来についても、『ユリシーズ』では詳細に書かれていて素晴らしいと思うのです。

ということで、縷々述べましたが、大半は皆さんご存じのことを、時系列にしたがって平面的に表面だけをなでさすったことになりました。

しかし、単に非凡な歴史叙述、知識の集積への讃嘆とは別に、マルクス高弟としてのいださんを現代の視点でどういうふうに取り取るか、位置づけるか、ということになると、それはわたしの能力外になります。わたしとても、マルクスについて経済中心史観、実践的主体論、構造論をはじめ、唯物弁証法、唯物史観などに触れたことはありますが、わたしはそもそも唯物論者ではないようなので、今回はメルロ・ポンティもアルチュセールもヴィトゲンシュタインも敬して遠ざけることにしました。

聞くと、マルクス自身は「わたしはマルクス主義者ではない」といったとのことですが、マルクス主義が実践を重んじていたことは確かで、その援用によりソヴィエト革命を成功させたレーニン、これを悪用して20世紀最悪のオートクラートル(専制君主)であり、マルクスが嫌悪した神、それも地上最悪の神になったスターリンをマルクス主義が生んだのも歴史の皮肉ですが、いずれにせよ、マルクスは「人類がもっとも美しく花咲いた人類の歴史上の子供時代……永遠の魅力……ギリシア」といって古代ギリシアを憧憬しているので、その極東の高弟を名乗るいだももさんが本書を捧げるべきは、同じユダヤ人、キリストとともにこの2000年間の人類世界にもっとも広大な精神的影響を与えたヘル (=ミスター)・マルクスではないかと思うのです。

ご静聴ありがとうございました。

## 質疑・応答

猪野修治　どうもありがとうございました。近藤さんのレジュメを読ませていただきながら思いましたのは、この大著の書評のことなんです。最近、この本に関する書評や論評は出ているのでしょうか？　あまり見ないものですから、1ヶ月ほど前にも、藤原書店に問い合わせしてみたところ、ほとんどなかったのです。わたしはこの本の本格的な論評を読みたいですし、いずれはそれを集約して皆さんに公表したいと思っています。そういう意味で、先に、ご紹介しました近藤さんのレジュメの文章は、本当に貴重なものでして、その一行一行に込められた思いをなんとか普遍化したいと思っています。

わたしが最初に読んだ書評は、京都大学名誉教授の本山美彦さんが、いいださんたちのグループが出されている『未来』という機関紙に書かれたものです。「さあ、立とう、恐れるな、のメッセージを聴く」という文章で、二一世紀を生きる若者に対して訴えています。なによりも、わたしが関心を持ったのは、本山さんが、「何よりもこの大著の中には、若い芽を育てようとする強烈な意志が存在している。若い人を誰ひとりとして叩きつぶしてはいない」と書いていらっしゃる事です。わたしも、本山先生がおっしゃっているような感想をもちました。内外の多数の著者の見解を論評しながら、それらに全面的に賛同するわけでもなく、どんどん論理を展開し、いいださん独自の新たな思想の地平に持っていく。おそらく、具体名は述べませんが、いいださんに本書で考察・論評された著者の方々は勇気をいただいたんじゃないかと思います。

片桐さんの前回のお話、および『未来』に書かれた書評のなかで、この大著の「読み方」についてご指摘をなさっています。針生さんや近藤さんのお話もそうですが、第三者による真摯な論評をこの研究会でまとめて、皆さんが読めるような形にしたいと思っています。そこでお願いですが、この本の書評がございましたら、あるいは見かけましたら、コピーをわたしにお送りいただけないでしょうか。

では、リプライ講演の前に、近藤さんのコメントに関して何か質問がございましたら、お願いいたします。感想でもけっこうです。……いらっしゃらないようなので、わたしが近藤さんにお聞きしたいことがあるんですが、よろしいでしょうか？

こういう学問集会は講師の先生を絶賛して終わることが多いんですが、わたしは、いいださんの前では、それはやってはいけないと思っています。もう少し全体の構造が目に見えるかたちで書いていただきたかったと思っています。近藤さんのレジュメに、『ユリシーズ』は比較的そうしたものに無関心で、そのことが部分的にもものすごい内容をはらんでいながら、その素晴らしい内容を順序だてて物語り、首尾一貫した概観を、読む者の頭にきちんと残すという結果を招きにくくしているような気がします。わたしは『ユリシーズ』を、単なる知の宝庫としてではなく、『芸術作品』と位置づけたいので、あえてこんなことを言わせてもらいます、と書いてありますが、僭越ながら、そのとおりだと思います。

した。ですから、近藤さんには、この大著をお読みになった動機が、どのへんにあったのか、伺いたいのです。

近藤節也　動機というよりも、いいださんとは、お付き合いが深いから、また、わたしも物を書く立場として、いい加減な読み方はできないわけですがけれども、とにかく、そういう感想を持ったんです。それから、わたしなんか接したことのない単語が非常に多かったので、ちょっと付き合いにくいなと思ったところもあります。それはしかし、わたしが無知なんで、この本は高段者向きですから、わたしがそこに達していないことがあるわけですから、ヴィトゲンシュタインやメルロ・ポンティエーが、全体の中でどういう位置を占めるのかということが、わたしにはよくわからなかった。

猪野さんが映画監督といってくださいるけれども、わたしだって一字一句全部読んだわけではないんです。しかし、真剣に書かれたものは、こちらも最大限の状態で読む、というのがわたしのやり方ですから、読んでポイッと捨ててしまうようなものなら、流し読みでもいいですけども、やっぱりこれは時間がかかります。

わたしは、自分が知らない単語があつたら書き抜いておこうと思っていたんですが、最初のうちはやっていたんだけど、多すぎるから途中で辞めちゃったんですよ(笑)。それは、わたしがマルクス主義とかに無知だからなのか、それとも、そういう単語がごく自然に使われているのに、わたしが知らないだけなのか、わかりませんが、わたしもこれまで相当いろんな単語にぶつかっているはずだから、そのわたしがわからないということは、かなり難しいということです。時には誤植もありましたしね。

ただ、いいださんは自分を100%出すことが先にあって、読む人全部に、わからそうと思って書いているわけではないんです。わたしは、最初に東映の時代劇で、助監督になったんですが、そのころの時代劇の監督は、とにかく観る人間にわかりやすく撮れと、そればかりをいうんです。ストーリーが飛躍するとわからないから、子供でもわかるように作れというわけです。そういうことが非常に大事だった。そんな癖がついてしまったものだから、わたしの書くものは、わかりやすくしょうがないんです。しかし、わかりやすく書くことも匙加減が難しい。ここに漢字を使いたいと思っても、使わないで仮名にしてしまったりするので、最近のつまらない文章はみんな仮名ばかりです。

わたしはすぐ妥協して下に降りていってしまいますが、もも先生は、全然、人のことなんかかまわない。俺様の書くものは、わかってもわからなくても、おまえたちが読むのは当たり前だ(笑)と、こういう立場です。わたしはつまらないところで気が弱いものだから、この字は今流行っていないだろうとか思って、わかりやすくしてしまう。最近ではそれでも難しいといわれます。今の若い人たちに合わせるということは、作品をつくるとか書くとかということとは、別の苦勞がいます。

猪野修治　ありがとうございました。近藤さんのコメント、皆さん、いかがでしたまし

ようか。わたしは本当に胸のすく思いがしました。なかなか怪物のいいださんに、こんなとは言えないですから。

前回の録音テープを聞いていて気づいたのですが、わたしは無駄な発言をして、いいださんに叱られていました。針生さんがこの本をとて読みやすいとおっしゃったのに、わたしは難しいと言っているようで、その後に、いいださんが、おまえはこの研究会をぶち壊すためにやっているのかと発言されています（笑）。

そんなつもりは毛頭ありません。それとはまったく逆でして、わたし自身がもっと勉強したいと思いましたが、さらに、できれば、なんびとにも開かれた場所で、みなさんとともに勉強しようというのが、この連続懇談の目的です。一般の市民が、いかに重厚な書物でも、気楽に読みかつ語れるような、「作家と市民の繋ぎの役」を果たすことが、わたしに課せられた任務であり、また、懇話会の重要な趣旨でもあります。ですから、いいださんに楯突くような言い方をしているようにも見えますけれども、そうでありませんので、ご理解いただきたいと思います。

それでも、近藤さんのお話を伺って、わたしははっきりわかりました。いいださんは人がわかろうがわかるまいが、どんどんお書きになっていて、おまえたち、本気になって読め、それ以外にないんだということです（笑）。この膨大な著作を前にして、著者と読者と参加者が、相互に自由闊達な議論できるようにすることが、わたしの仕事だと自覚しております。非常に申し上げにくいことを申し上げまして、スカッとしたところで休憩にしたいと思います。

## リプライ講演：歴史の根本を問い直すこと

いいだもも

本日のような素晴らしい好天気の日、こんなにたくさん、お出かけいただきまして、まことに恐縮しております。特に近藤節也さんには、長いご縁もございまして、東京からご夫婦でいらしていただいて、こんな 8 頁ものレジュメまで作っていただきました。近藤さんには、コメントも含めて克明にこの本に意のあるところをご報告していただきましたので、もうほとんどこれで終わりでもいいんじゃないか、と思います（笑）。ですから逆に、これから 2 時間弱、近藤さんがコメントされたことについて、わたしのほうから付け足しをさせていただこう、と思っております。

### 1 なぜ〈三部作〉の次に続いて『恐慌論』を書いたか

今日は日曜日ですから、NHK で「素人のど自慢」をやっていますが、これは NHK の番組の中でわたしの最も好きなものの一つです。世間では、わたしはいわゆる高尚なことばかりやっているとあるいは誤解されているかも知れませんが（笑）、実はわたしは非常に下司な男でして、だいたい「素人のど自慢」クラスで日頃満足して暮らしております（笑）。今日もそれを観ておまして、本日は京都府の福知山市というところから中継で、トリは前川清さんで、とても面白かったです。今日は「ラブ・ミー・テンダー」を歌った男の人が、賞を取ったんですが、これがまた非常に素晴らしかった。ああいう素晴らしい人がこの世にいるということは、わたしにとっては励ましになりました。

要するに申し上げたいことは、この本を猪野修治さんが深読みなさって、いろいろと難かしくしちゃうんだけど（笑）、まあこれは一種の素人のど自慢なんです。わたしはまったく歴史家じゃありませんから、歴史についてはド素人もいいところで、だから勝手に好きなことを書けるわけです。ですから、この研究会も「素人のど自慢」的にやればいいんです。皆さんの琴線に触れるようにうまく歌えているかどうかは、人様の判断に委ねる以外ないわけですが、本人としてはやたらにいい気持ちなんです（笑）。要するにカラオケですから、他人には多少響きを買うかもしれませんが、本人はこんなにいい歌はないと思って気持ちよく書いているので、この気持ちが大事なんです。

今日、猪野修治さんが司会の中で、いいだももはもうじき八十歳になるんだとおっしゃいましたが、それだったらわたしはまだ前途春秋に富んでるんだけど（笑）、実はもうとっくに八十歳を超えちゃったんです。もう八十一歳も超えてしまいましたから、今年の終わりくらいに、非常に残念ながらこの世をご辞退申し上げる以外にないところにまで来ているわけで、それでこんな歴大なものを書きまして、その上こんなものの、次にわたし

のライフ・ワークとして『恐慌論』という本を、書きました。専門のことを申し上げれば、わたしはマルクスの衣鉢を継いでいるマルクス経済学者ですが、マルクス経済学とは要するに「恐慌論」なんです。もうすぐ論創社という本屋さんから出る予定ですが、こんなに厚くありませんから、ぜひ買って読んでください。わずか 1400 頁です (笑)。この本の 3 分の 1 です。いい本ですよ。本屋さんの予定では、来年、新年のめでたい初荷として全国の本屋に出廻ります。

近藤節也さんが、この『ユリシーズ』を芸術作品として読んだ、とおっしゃってくださいましたが、マルクスの『資本論』もやはり 3 冊ですが、マルクスも自分の『資本論』を「一個の芸術作品」だと主張していたんです。同じ 3 巻本でも、わたしのはまるで序破急になっていない、構成力がなっていない、と近藤さんがおっしゃいましたし、芸術作品になっているかどうかでいえば、なっていないと見たほうが良いとおっしゃったわけですが、自分自身ではマルクスにあやかって、この 3 巻本も何とか芸術作品に仕上げたい、と思いましたが、それに少しでも近づくことができていると、ひとえに思っています。

『恐慌論』は、暇だから書いたわけではありません。何度も言いますが、マルクスの『資本論』の真髄中の真髄は恐慌論なんです。だけど、かれは、わたしみたいに八十二歳まで生きませんでしたから、かれマルクスには生理的な持ち時間の限度があったんです。『資本論』は「剰余価値学説史」を含めると、本当は全 4 巻なんですけど、それはかろうじて完成して、人類文明史にとって決定的な労作になりましたが、にもかかわらず、恐慌論については、その基本的規定を方々にバラバラに書き散らかしたきりで、それを自分で整理して集大成して 1 冊の体系のあるものにまとめる時間が持てないまま、死んでしまった。かれは机に向かったまま死んだんですけども、涙を吞んでいたにちがいない、と思います。

この衣鉢を二〇世紀的現代において継いだのが、わたしの先生である宇野弘蔵さんという世界的なマルクス経済学者です。マルクスが完成できなかった恐慌論を完成させることが、自覚的に宇野さんの一生の仕事になったわけです。人間が一生の仕事を決めるときには、何らかの動機が必ずあるんでしょうけれども、世の中にはきわめて殊勝な変わった人もいるもので、宇野さんは一生をかけて『恐慌論』を書いたんです。これは 20 世紀における最大の経済学の本で、誰がなんと言おうと、この本には消しがたい人間史的な意味がありますが、これが最後にはならなくて、わたしみたいにそれにまた 1400 頁の注釈を書く者が出てくるのはなぜなのか、と申しますと、宇野さんの『恐慌論』には実は根本的に無理があるからです。

つまり、本当には、マルクスの遺志をたしかに継承したものの、まだ本当にはそれを完結させないということです。完結していれば、その本を読んでいけばいいんですから。なにが完結していないかは、ぜひわたしの『恐慌論』をお読みいただきたいのですが、わたしどもがやっている政治グループの機関紙『未来』の最新号のいちばん後ろに、新刊案内で告知されていますので、今日それを持参しまして何部かありますから、興味のある方はお持ちください。



わたしがなぜ『恐慌論』を書いたのか、三部作『ユリシーズ』のつづきのつもりで、簡単にコマーシャルをします。宇野弘蔵さんは、『経済原論』と『恐慌論』という2冊の主著を書きました。宇野さんはたくさんいい本を書いていますけれども、その中で一番大事なのは、この2冊です。この二冊の本は、全世界的に言って、マルクス経済学の最高峰です。例えば、わたしにとっては文明史論としてこの3部作と、次に出す『恐慌論』が大事です。それは、わたしがまもなく死ぬと思っているからで、ライフワークとして書いているからです。それと同様に、宇野さんにとっても、その2冊はライフワークだったんです。

宇野博士の論理でいうと、マルクスは資本論体系を完成して、これを経済額原理論といいますが、資本主義分析のために決定的な原理論を作りあげることができた。けれどもマルクスは、先ほど申し上げたように、恐慌論を自分ではついにまとめることができずに、恨みをのんで死んでいった。宇野さんは、その恐慌論を二〇世紀になってから、自分で書いたというわけです。だけど、宇野さんは、先に申しましたように、『経済原論』と『恐慌論』の2冊を書きました。なぜ2冊に分かれてしまったのか？ わたしだったらそういうことはしない。経済学原理論、つまりマルクスに即していえば『資本論』として、一本です。これが、わたしと宇野さんとの間の違いの発端です。

「資本論」体系というのは、どんなに補充して完成したとしても、基本的にそれはマルクスが構成した1冊なんです。その1冊のしめくくりのところに、恐慌論がくる。それを書き終わらないで死んでしまったわけですから、それを仕上げるのなら、『経済原論』というのは恐慌論で終わらなければならない。ところが、宇野さんの場合にはそうならなかった。「経済原理論」の方は『経済原論』として一九七一年に公刊し、続けてその翌年に『恐慌論』を出した。これで、宇野博士の基本的な体系は、いわば二元論的に完成したんです。しかし、マルクスは一元論でなければだめなんです。それはどうしてかということを、今度わたしは自分の『恐慌論』で明らかにしています。よって、資本主義分析に関する最大の問題は、今日のわたしをもって解決したと自負しているわけです。

## 2 宇野「経済原論」のアポリア（難点）

それはどういうことかという、これは少し専門的な話になりますが、大切なことなので、ちょっとだけ本日その基本のところを説明しておきます。

マルクスの『資本論』の中で、商品・貨幣・資本と上向していくポイントのところの「貨幣論」の命というか概念中の核心というのは、「貨幣としての貨幣」、つまり「世界貨幣」なんです。簡単にいえば、金です。資本主義は、金という貨幣を裏打ちにして、全体として用を足しているわけですから、わたしたちは、「金」、すなわち「世界貨幣」なしでは、一刻たりとも成り立たない。商品を買えないわけです。だから、一九世紀中葉の最先進資本主義イギリスを核として、産業資本的蓄積様式を基本軸として形成された〈パクス・ブリタニカ〉世界秩序は、「国際金本位制」として型制化された。

これは一元的・形式的な商品形態によって総括された、或る意味でものすごく単純化された合理的な仕組みなのですが、単純なことというのは、考えれば考えるほど深い問題になってきます。みんな毎日スーパーに行って買い物しているわけですが、そのことの意味をわからずにやっている。人はその為すことを知らざればなり、です。そのことの意味や仕組みを考え始めると、マルクスになり、宇野弘蔵になり、わたしみたいになってしまう(笑)。

わたしのみるところ、宇野さんの最大の欠陥は、「世界貨幣」を自分の経済原論から放逐してしまったことです。なぜこんな、マルクス「資本論」体系の基軸規範である「貨幣としての貨幣」を、その体系から排除するような異常事態が、宇野体系に起きることとなったのか？

それはなぜかという、宇野博士は、経済学原理論をマルクス『資本論』を純化した体系として完成することを、自分の全生涯の使命にしている、マルクスにおける経済学原理論にそぐわないところをすっかり完全に純化しようとして——一九世紀中葉のイギリス資本主義が、かれにとって一番純化された資本主義なんです——それから「純粋資本主義のモデル像」をつくって、これに純化されない規範・概念については全部自分の「経済原論」から排除し放逐してしまった。それは無理だ、とわたしとしては思うわけです。

一九世紀のイギリスを、わたしはものすごく尊重し感心してます。例えば、自国で作った工業製品を売って、世界中から綿花でも小麦粉でも買えますから、そうやって「農業問題」をそれなりに解決しました。実は資本主義においては農業問題は難点中の難点であって、けっして解決されてはいません。二〇世紀になって、みなさんだれしもご存知のように、世界の農業問題は戦間期以来決定的なものになっていますし、戦後の今日では「南北問題」になっている。後発の後進国であった日本や中国の農業が、近代化の下でどうなっているかということを考えてみれば、そのことの大事さはすぐわかります。

わたしの考える現代マルクス主義が新しい合意形成上どうしても解かなければならない問題の根幹は、農業問題の解決です。農業が基礎でなければ、人類は生きていけない。単純明快なことです。そのためには、資本主義を根底からひっくり返さなければだめなんです。これは世界革命の一つの重要な構成部分です。わたしどもの古い定式化では、「農業基礎・工業先導」です。戦間期の日本の言い方でいえば、「都市解体、農業復権、農工両全」です。

それから、一九世紀のイギリスで恐慌がくりかえしくりかえし——といってもほぼ十年毎に都合五回ですが——起きますが、その時、イングランド銀行は最終的には金を国外へ流出させて、最後にこれで決済をして世界市場恐慌を収束させます。金の流出で問題なのは、中心国のイギリスの資本主義が、それによって儲かることが全然ないということです。

つまり、資本主義においていちばん肝心な問題が、論理的な言葉でいうとそこでは「捨象」されて、〈宇野理論〉のモデルで言えば「純粋資本主義モデル」的に純化されてしまうわけです。捨象されて、不純なものは全部そこで捨てられてしまうんですから、純化され

るのは当然です。「純化された資本主義像」というのは、一九世紀中葉のイギリス資本主義の商品の純化力にして基礎をもっていると言えても「純粹資本主義モデル像」というのは、宇野さんが頭の中で勝手につくりあげているものなのであって、それは現実的な資本主義ではないんです。

そういうことで宇野さんは、「世界貨幣」というものを不純であって、原理論には要らないものであるとして、それを捨象して資本主義体系を構築してしまった。「世界貨幣」がなければ、当然「世界市場」もありません。世界市場はマルクス『資本論』の第1頁に出てきます。このアンファング（最初）に出てくる概念自体がなくなってしまうわけですから、つまり資本論体系のいちばん核心の部分が最初からなくなってしまうわけですから、こんな面妖なものは、わたしに言わせれば、どこまで行ったらって経済原理論とはなりえません。だからだめなんです。恐慌というのは「世界市場恐慌」ですから、世界貨幣と世界市場なしに恐慌論ができあがるわけがない。宇野さんの『恐慌論』は、非常に独創的な本ですが、それでもそれは、わたしから言えば、根本的に無理があります。

わたしの『恐慌論』は、胸をお借りした御礼もあり、宇野さんの霊に捧げておりますが、わたしが何十年もかかかってこの本を書き上げた今日は、残念ながら宇野さんはもうこの世におられませんでしたから——わたしは、あの世というのは、信じていませんが——もうじきどこか遠い遠い所でもしもお会いできる機会に恵まれれば、宇野先生にこのことを申し上げて、反論をいただいて激論を交わしたい、ととても楽しみにしております。そうすればまた、皆さんを喜ばしかつ悩ます新しい思索項目が、三個くらいできるんじゃないか、と思います（笑）。

### 3 100年後には超ベスト・セラー

猪野修治さんが最初におっしゃったように、この3部作ができたのは2005年11月30日、昨年末なんです。それを受けて今年2月26日の日曜日に、地元でということで、江ノ島の岩本楼で、わたしの釣り仲間たちが「出版をお祝いする会」を開いてくださいました。漁師筆頭の小菅文雄さんという方が代表、わたしの『〈主体〉のユリシーズ』について最初のコメントをしてくださったんですが、メルロ・ポンティとヴィトゲンシュタインのことを「漁師」である小菅さんが、淡々と論じてくださったのです。

さっき近藤節也さんは、自分は唯物論者じゃないから、そのへんの話すのを止めると言われ逃げました（笑）が、海で魚を獲っている人が、この本に書かれてある今日の哲学の最前線での核心の問題を、ぴたりと言い当てました。だから、この本は本当はものすごく易しい本なんです（笑）。漁師でさえ、というのは差別的な言い方になりますけれど、わたしも近藤さんも、たまたま大学は出ていますが、目に一丁字があるかどうかでずいぶん違うわけで、漁師の小菅さんは見事にそこの高次の哲学問題を、今日的に読み解いたんです。或る意味ではこの本は、その程度の本なんです。部厚いからと畏れをなすことは、

まったくありません（笑）。

「出版記念会」と当日の江ノ島「岩本楼」には、驚いたことに、八十六名もの方々が集まってくれましたが、わたしは戦後六十年間、社会運動をやってきましたが、わたしのこういう本の固定読者というのは決まっています、全国で五百名なんです。六十年間やって五百というのが、割がいいかどうかというと、わたしとしては割がすこぶるいいと思っています。マルクスの『資本論』は、出した時売れたのは十部ですからね。1世紀以上たった今では、世界中で1億冊以上出ています。だから、わたしの本のことも、あまり馬鹿にしないでほしいです（笑）。あと1世紀以上たったら、わたしの本も1億冊ですから、わたしの遺族はその頃にはもう、何の生活上の心配も要らないことにたぶんなるでしょう（笑）。

猪野修治さんが、この本は若い人のために書かれているんだ、とおっしゃってくださいましたが、本当にそのとおりで、わたしは若い人のために書いているんですが、1世紀たてば若い人も110歳くらいになってしまいます（笑）。そのときに、いいだももという人間がちゃんとしたことを書いているかどうか分かることになる、と思います。人類文明史八千年ということを書いた本ですから、そこに地元でやる意味が成り立つかわかりませんが、岩本楼にそれだけの人が集まってくれて、わたしは六十年間やってきた甲斐があった、とその時つくづくと思いました。

この本を出してくださった藤原書店で、毎月「小難しい本を読む会」という小さな会がありまして、藤原良雄さんが会社の会議室で開いているものなんです。3月18日のやはり日曜日にその会があったときに、驚くべきことに、四十人くらいが集まってこられ、超満員で会議室に入りきれなかった。2次会にも皆さん参加されて、とてもレベルの高い議論になったんです。わたしは、そこで教えられることがたくさんありました。猪野修治さんもこれに参加されていましたが、今度は猪野さんが地元藤沢でも4回にわたってこのような懇談会をやってくださいることになった。今日はその2回目ですが、第1回が5月7日であって、その時も四十五名の方々が参加していただき、2次会を駅近くの「庄屋」でやりましたが、こちらにも二十名くらい参加していただきました。コメンテーターの針生一郎さんや片桐薫さんも参加されて、普通の飲み会ではなく、引き続き高度な議論が沸騰して、たいへん調子がよかったです。

あと二回ありますが、猪野さんのおっしゃっているように、この記録はこうしてちゃんととってありますから、それをもとにまたぜひ1冊の小冊子として出したいと、社会評論社の松田健二さんがおっしゃってくれています。これは、コメンテーターのみならず出席していただいた地元の方々の発言が、全部収録されている、非常に生き生きとした記録になることは間違いありません。またこれで少し行けるんじゃないかな。もう少し行けば、藤原書店は驚くなかれ、この3部作を1000冊作ってくれたんですが、売り切れになっちゃうんじゃないですか（笑）。だから、これ、今月中に売れちゃうよ（笑）。日本文明史的にはものすごいことだけれど。……そういうふうにはわたしは、希望と期待をこめてこの三部

作の行くえを思っているんです。

#### 4 人類文明を八千年を遡る根拠

さて、前回から何度も「八千年の歴史」と申し上げていますが、八千年を遡って歴史を考究するのは、遡る根拠が〈いまここ〉にあるからです。もっといえば〈いまここ〉に全世界的な“危機”があるからです。わたしにとってそれは、イラク戦争が泥沼化していることです。今朝がた、小泉純一郎首相は、イギリス軍とオーストラリア軍のイラク撤兵を受けて、自衛隊をサマワから撤収させたいと、アメリカに告げました。米日国安保同盟があるので仁義を切ったわけですね。それをアメリカの国防長官が了承したわけですから、これは近頃最大のニュースです。これで間違いなく、アメリカ軍はこの年内にイラクから撤収しますよ。わたしは、今年早くから、そうなると言いつづけてきましたが、その時にはだれも笑って、わたしの予言をちっとも相手にしてくれなかった、けどまたまた、わたしの洞察は大当たりしたじゃないですか。これで誰も征服者の軍隊はイラクからいなくなってしまうわけです。

ブッシュと小泉の完全な敗北によって、これ以降、近頃わたしが提示している「反転攻勢」が、世界的にも日本的にも本格的に開始されることとなります。これはヴェトナム戦争の時と同じことで、完全にアメリカ帝国主義の大敗北です。これで歴史はまた変わるわけです。〈パクス・アメリカーナ〉という現代資本主義世界システムが崩壊へと向かうことになるわけです。わたしの予測では、天下は大動乱を迎えつつあります。そのときにこの本がどれくらい爆発的に売れるか（笑）、ひそかに楽しみにしておりますが。

それで、〈いまここ〉にある世界的危機の由来を考えると、どうしても歴史を遡らざるを得ないんです。一部の方は誉めてくださるつもりで、この本を、「いいだももが古典古代ギリシア以来の歴史を書いた大著作である」というふうにおっしゃってれていますが、その誉め言葉は厳格に言えば間違いです。古典古代ギリシアでは紀元前 600 年ですから、せいぜい 2500～2600 年くらいしか遡れない。それでは、〈いまここ〉になぜこんな危機があるのか、その歴史的な根元はわからない、ということを上掲しているわけです。古典古代ギリシア文明からの 2500～2600 年からの歴史は、わたしたちが学んできた西洋史の常識です。それは実は嘘なんだということを、わたしはこの本で、実証的に言いたいわけです。

古典古代ギリシア文明は、約 2600 年前に、地中海世界文明の中で「原幾何学紋様」というのができたときから始まります。そこから、地中海世界に、アテネ・デモクラシーをはじめとする百二十ものポリス国家が興ります。そして、ヘロドトスの『歴史』を読むとおわかりのように、ペルシア戦争という世界戦争で 古代オリエントを制していたペルシア大帝国が、その眇たるポリス都市国家の連合軍に敗れて、当時の地中海世界のヘゲモニーが変わった。

東の大世界帝国ペルシアが西の眇たるアテネ・ポリス国家に敗れて、世界史が東から西

へと大きく方向転換したわけです。つまり、エーゲ海の西端に興ったアテネやスパルタをはじめとする百二十ほどの眇たるポリス国家群が、ペルシア大帝国を打ち破ったことで、地中海世界の歴史が大転換した。

それから後は、ご存知のように、今日の西欧中心主義的な世界ができあがってくるわけです。資本主義に即していえば、グローバルゼーションということですがけれども、グローバルな、一元的な、〈パクス・アメリカナ〉的な現在の世界が、その末にできた。それは2600年前のペルシア戦争の帰趨から来ている。

では、なぜ古典古代ギリシア文明から歴史を見てはいけないかというと、この本が書いているように、それ以前に地中海には「ミノア・ミュケーナイ文明」があるからです。人類文明史という範囲でいうならば、その起源、つまり、地中海世界史の始まりは古典古代ギリシア文明からだ、という西洋史の常識は嘘で、本当は「ミノア・ミュケーナイ文明」が源なんだ、とこの本でわたしは言ってるんです。なぜミノア・ミュケーナイ文明が人類文明史の起源かというと、近藤節也さんが本日おっしゃったように、ひとつにはそれが「中石器時代」だということです。エジプト文明、メソポタミア文明も、みんな同じです。ですから、2500年前の古典古代ギリシア文明からが人類文明史だというのはまったくのインチキで、それ以前に実に5500年にわたる先史があったのだ、とわたしは書いたわけです。

ミノア・ミュケーナイ文明は、マルクスの概念でいえば「貢納制」の文明です。古典古代ギリシア文明というのは、民主的な文明であったわけですが、同時にマルクスの概念でいえば「奴隷制」文明です。それは、ペルシア戦争でペルシア帝国が負けてしまったから、そういうめぐりあわせになってきたんです。

ペルシア帝国は非常に優秀な古代世界文明を持っていて、けっしてギリシア以降の、わたしから言わせればチンケな奴隷制文明とは違います。オリエン特文明が奴隷制だというのは間違った考えです。古代オリエン特ではなくて、アテネ民主主義こそが奴隷制社会に直結していたわけです。オリエン特にもむろん、奴隷は存在してはおりましたけれども、その存在は各々の家内奴隷であって、それはけっして社会を構成しているような中心的存在ではなく、副次的な存在でした。

後期の古典古代ギリシア以降からが、奴隷制文明時代の開始です。奴隷制世界は、世界史的に言えば、ポリス民主主義文明に伴って、この世に出現したわけです。古典古代のポリス民主主義の文明は、同時に、奴隷制文明かつ家父長制文明であって、その基本的概念性格は、古代ローマ帝国に至るまでそうです。奴隷制時代が終わるのは、古代ローマ帝国が「野蛮人」と呼んでいたゲルマンの「バルバロイ」に滅ぼされて、それにとってかわって、中世ヨーロッパの農奴制社会ができてからです。宗教でいえば、その新しい世界の支配イデオロギーがキリスト教なわけですが、社会構成体としては、その中世のキリスト文明は「農奴制」なんですね。そこで初めて、奴隷制がなくなるんです。

## 5 女性の世界史的敗北によってもたらされたもの

歴史は、ペルシア戦争で、ペルシヤ世界大帝国が敗北を喫して、西の諸ポリス都市国家が勝ったために、いうならば大きくひん曲がるんです。歴史から見れば、「貢納制」社会のほうがもともとの正道なんです。この正道であった紀元前 500 年以前の地中海社会は、「母系制」なんです。歴史が曲がったことによって最初に起きたのは、母系制の崩壊です。だから、母系制社会がなくなってから、「フェミニズム」の問題が起きてくるのは、今日では非常によくわかります。

母系制社会では、海も陸も女神が全部統御していた。女神は豊饒の神様であると同時に、冥界の神様でもあった。近藤節也さんが今日おっしゃった、ハデイス（地下の世界）を治める神様です。穀物は冬になると枯れて死に、また春に種を蒔くと芽が出てくる。これは二柱の神ですから母親と娘であって、母親が地上を、娘が地下（冥界）を御しているという、非常に正確な体系が宇宙論とともにできあがっていた。

それが、ペルシア戦争で諸ポリス国家が勝利したことによって、崩壊してしまった。これは、エンゲルスの言葉で言えば、女性の「世界史的な敗北」だといえます。ですから、もしこれから天下大動乱が起きれば、かつての母系制社会にあった女性の位置が復元されるであろうことは、間違いない、とわたしは思っています。女性の「復讐戦」の時代になるわけです。

このことは、わたしの本では「ディオニューソスの問題」として、3分の1に近いスペースを使ってえんえんと書いています。古典古代ギリシア文明は、ヌース（叡智、理性）の文明であり、アポロン神のごとく光輝く、くっきりとした形を描く可視・可触の文明です。今日のわたしたちも爾来その文化の栄光に浴してきたわけですが、現在はその「ヌースの文明」のなれの果て、つまりは、合理化を追求してトコトン追求した極みに現られ出てきた「非合理の世界」にきているわけです。そのことを 20 世紀の初めに言ったのが、この本でも繰り返し触れているフリードリッヒ・ニーチェなんです。

ニーチェは、今日の人間には根本的な価値転換が必要であり、それを主体的に担うことができなければ人間はもう終わりだ、と二〇世紀の開幕期の初頭で言っています。かれは気が狂って死にましたけれども、そういうことを世界でただひとり先んじて考えていて、正気でいられることは難かしいんじゃないでしょうか。

ニーチェの話のポイントが、ディオニューソスです。御承知のごとく、かれはニーチェは、古典古代ギリシアについては誰よりもよく知っている俊敏・博学な古典学者でした。そういう人が『悲劇の誕生』で、学会でのそれまでの定説とは違った異様な異説を唱えたために、古典学会から排斥され、ついに狂死してしまいました。『悲劇の誕生』は何度読み返しても素晴らしい本ですが、最初に付けられたタイトルは、「音楽の精神としての悲劇の誕生」というものでした。

「目の文明」には、耳はありません。ですから、先ほど近藤節也さんがおっしゃったように、詩と音楽についてはギリシア哲学は論ずるところはなかったわけです。近藤さんの

ご指摘によれば、それはアリストテレスの『詩学』でわずかに論じられているだけです。わたしがニーチェの『悲劇の誕生』が深いと思うのは、ギリシア哲学によってギリシア文明の根拠を説明するには、その一元論的「目の文明」の限界に災いされて難がある、と書いているところです。

アリストテレスは、ソフォクレスやエウリピデスの悲劇はもちろんのこと、アリストファネスの喜劇も、ともに音楽精神、歌から出てくると言ってるんですが、かれの場合ではどうしてもその音楽からのギリシヤ悲劇の延生の脈絡が二元論的になってしまって、そのことの一元論的な証明が最後までできなかった。これがアリストテレス哲学の限界です。そこをニーチェが突いた。

ですから、ニーチェは、古典古代ギリシアでは、本当はミューズ、つまり音楽が決定的なものであって、それは悲劇であって、ギリシア精神の根元は合理的な「理性の文明」にあるんじゃないくて、古代ギリシヤ以外の音楽精神から生まれた〈悲劇〉にあるんだ、と喝破したわけです。これが当時のヨーロッパの古典学会にとっていかに異端の説であったかを考えると、ニーチェが狂死せざるを得ないところまで追い込まれたことも、よくわかります。

合理主義の神であるアポロンがデルフォイ神殿に鎮座ましまして、「汝自身を知れ」という神託を出したところから世界ができあがったと言われ、わたしたちのすべてがずっとそのように物事を間違っ、少なくとも一面的に教えられてきて、世界中がいまこのように惨憺たる内的腐蝕の極みにまで来てしまっています。だけれども、デルフォイの神殿には、アポロンだけがいたんじゃないくて、そこにはアポロンとディオニューソスの両方が祀られていた。たとえば、デルフォイの神殿の中には小屋掛けがしてあって、その主はディオニューソスです。考証の示すところによれば、ディオニューソスのほうが先にデルフォイにやってきて、アポロンはその後から到着したと言われています。

その後先を問わず大事なことは、アポロンもディオニューソスも、もともとは小アジアの奥地からやってきたオリエントの神様だということです。2500年前から後は、デルフォイの神殿はアポロンの神殿であり、それはゼウスを先頭にしたギリシヤ神話文明でして、それから人類文明史は西洋文明史に繋がってくるわけですが、それより昔の5500年前に、オリエントの方からギリシヤ人とドリア人の南下にもなっているいろいろな神様が渡ってきたわけです。だから、アポロンも、当然ディオニューソスも、ギリシア側の価値判断からいけば「バルバロイ」の神様です。それが小アジアの奥地からエーゲ海までやってきて、デルフォイに流れ着いた。それでもって、合理主義文明がつくられたわけです。それより以前の古い文明のほうに、或る意味では合理主義文明は切り捨ててしまった豊かさがあつた。

アポロン自身も変な神様で、リラという豎琴を持っているんですが、リラはもともとはギリシアにあった楽器ではありません。オリエントのものです。しかもフルートと共存・競合関係にあつて、アポロンのリラがフルートを圧迫して横笛の方を追い出してしまった。



アポロンが音楽を司るとされるのは、フルートを打ち負かして絃楽器リラの音楽をつくったからです。これは、古代ギリシアの「視覚的な文明」とはまったく関係ないし、アポロンはもともと「耳のいい神様」だった。耳がいいか悪いかは、文明にとっては非常に決定的な意味を持っていて、耳が悪いとどうしたって目の文化になる。だから文字でせつせと記録したりする。目の文明などというものは、そういうふうに分かる本人が耳が悪いからです。でも、もともとは耳がよかったアポロンは、デルフォイの神殿に鎮座ましましてからは、自らのオリエント由来の音楽の神であることを忘れ果てて、視覚的なギリシア文明の象徴となった。

ディオニューソスに話を戻しますと、ディオニューソスの文明というのは全然合理的なものではなかった。繰り返して言いますが、それがアテネの女たちの話からわかります。冬になると、季節のはやり病みたいなことが、アテネの女たちに一斉に起こります。なぜなら、ポリス国家は民主主義だといわれますが、それはこの本で繰り返し確認しているように完全に家父長社会でした。母権制を打ち倒して奴隷制を確立させたわけですが、市民による民主主義だといいますが、その市民というのは成人の男だけなんです。女は市民ではない。女は、奴隷制社会においては、奴隷以下なんです。でも、奴隷以下にされて甘んじている人間はいませんから、何かの拍子に溜まっていたものが噴出して来る。

それで、冬が近づくと、アテネ中の女たちの耳にどこからかディオニューソスの呼ばれる声が聞こえてくる。これは共同幻想ですから、一斉に聞こえるわけです。そうすると女たちはみんな、亭主と子供をほったらかして、自分の家と家族から飛び出して、山へ走っていく。そこで、ディオニューソスの踊りを踊り始める。耳の人が脚にくることがあって、そうすると踊りだすんです。踊らない文明はだめです。世界中のあらゆる文明は“踊り”ですから。踊ると今度は食欲が増しますから、そこで出会った生き物は子供でも何でも、手当たり次第に捕まえて、全部殺して食べてしまう。この本にも詳しく書きましたが、四肢をバラバラにして生肉のまま貪り食ってしまう。これで、女たちは蘇生するわけです。いかにストレスが溜まっているか、ということですね。

このように女たちが山野を彷徨することが書いてあるのが、ギリシア三大悲劇の一つで「バックス」という劇です。バックス、つまりディオニューソスに扈從した女は全部同じです。要するに、これは女の世界史的な反乱なんです。つまり、ディオニューソスの文明反乱は、ペルシア戦争でポリス国家が勝ったことによって女が世界史的な敗北を喫し、地中海世界の貢納制＝母系制社会が奴隷制＝家父長制社会に転換したために起こった復讐劇、敗者復活戦の反乱なんです。

バックスはまたの名を「マイナス」といいますが、マイナスというのは、踊り狂うバックスの信女のことで、このような女の社会的集団が絶えず反乱を起こすということが、人類文明史の基本にはあるわけです。それは数世紀にわたってあったことですから、どんなに合理化して歴史をそれなしに書こうとしても、それはとても隠し通せない。バックスとマイナスの問題は、文明史にとって非常に大事なことで、もしアポロンの古典古

代ギリシア文明を文明史の起源だとすると、この先史のことがすっぽりと落ちてしまうわけです。総じていえば、それはミノア・ミュケーナイ文明だけではなくて、オリエン特文明がみんな抜け落ちてしまう、ということなんです。

## 6 文明の分割とアイデンティティー

或る事柄を世界史的に比較するためには、ヨーロッパの基準だけではだめです。必ずミノア文明、中国文明やインド文明やエジプト文明も、視野に入れておかなければなりません。そしてこれらはいずれも、ヨーロッパ文明とは比較にならないくらい古くて豊かなものです。わたしたちは、その中で暮らしているのですから、そんなことはわかっているはずなんです。小学校から大学までずっと教育されつづけ（脅されつづけ）たために、だんだんコンプレックスが高じてきて、西洋文明がこの世で唯一のものだと思いうようになってしまっている。わたしが絶えず中国文明を引き合いに出すのは、それは全地球的には違うんだということを言いたいからなんです。

先ほど近藤節也さんが、楔形文字は中国や日本にも影響しているのかどうかと尋ねられました。わたしもよくわからないのですが、一つはっきりしているのは、楔形文字といわれている東地中海から発祥したオリエン特文明の文字は、エジプトのヒエログリフやアルファベットのもとになったフェニキア文字と関係がありますが、それには甲骨文字以来の中国の漢字とは全く関係ないということです。

漢字が使われだしたのは、いうまでもなく秦の始皇帝の時代からでして、漢字によって西のヘロドトスの『歴史』に匹敵する司馬遷の『史記』が書かれました。『史記』が書かれた時代はどのようなものであったかという、前回のときにも申し上げましたが、秦の始皇帝が「万里の長城」を築きます。万里の長城とは“概念”です。概念とはつまり“自己分割”です。概念をつくらなければ、文明の中核（アイデンティティー）ができない。なぜかという、概念によって自己分割しないかぎり、自分と他者との区別ができないからです。

「万里の長城」という目に見えるかたちの城壁ができたことで、中華の民は自己分割ができるようになった。なぜなら、その城壁の外側には、草原を疾駆する牧畜の民、すなわち匈奴がいたからです。匈奴のあとには突厥が続き、やがてモンゴル人が大蒙古帝国を興して中央アジアに一大帝国を築き上げます。チンギス・ハーンを太祖とする偉大なる大広域の専制君主制国家です。

かれら遊牧民ノマドの牧畜文明とのあいだに一線を画することによって、中華文明の型がはっきりしてきたわけです。中華王国は農耕民族ですから、農業中心の中央集権型の王朝国家ができあがった。その冊封体制といわれる東アジア世界秩序の中に、天皇制国家の日本は所属し、漢字文化圏、儒教文化圏の一員として今日まできている。このことはとても重要です。そういうふうに文明論というものを見ていくと、漢字文化圏のわたしたちが

区別してきたのは、西洋文明ではなくて、むしろユーラシア大陸の草原を駆けていた匈奴以来の牧畜民族とのあいだに、自分たちとの文明との根本的な相違をつくってきたこととなります。わが列島弧で、この二つの文明がぶつかりあったのが、「蒙古襲来」の元寇です。漢字以降の中華王朝は、ヨーロッパが自分たちが世界の中心だと考えたのと同じように、自分たちの農耕文明が世界の中心だと考えていました。

ところが、清朝末になって漢字以前の文字である甲骨文が発見されました。北京の薬屋さんが古い骨を削ったものを風邪薬として売っていて、よく治ると評判になっていた。羅振玉という偉い考古学者が、自分の奥さんがその風邪薬を買ってきて飲んでいてのを見て怪しみ、その元を調べてみた。するとそれは、お百姓さんが畑で拾って薬屋に売りつけたものだということが、わかってきました。羅振玉が現場に行き調べてみると、そこらへんからいくらかでも出てくる。その骨に文字が彫られていた。これが、漢字の元になった甲骨文字です。殷の文明が甲骨を焼いて占い、天下の大事をその占トの読み取りで決していた。本質的には、楔形文字がアルファベットの元になったのと、同じことですね。

中国の甲骨文字は、エジプトのヒエログリフと同じように占いに使われていた神聖文字です。近代は合理主義文明になってその意義がわからなくなってしまいましたが、あらゆる文明は最初はみな共同体社会、つまり宗教社会でした。その根本にあるのはト占で、ト占によって物事はすべて決されました。中国では亀の甲や獣骨を焼いて入ったひび（文様）を見て、国王と国王付きの御用学者が、近く雨がくるとか、外国が攻めてくるとかいつて、社会全般のことを占トしていた。占われた言葉は、その骨に刻まれました。それが甲骨文字といわれているものです。殷という国で使われていました。そのころの学問はすべて判じ方の研究ですから、占いの結果が行動選択の価値基準になり、社会は進退していました。

殷は自らを「商」と言っていたようですが、だんだん発掘が進んでいるんなことが明らかになってきています。殷は農耕文化ではなくて、もともとは外側のバルバロイである牧畜文化に属していた。それがいみじくも「商」という名前に象徴されていますが、牧畜文化というのは必ず商業文化なんです。なぜかというと、牧畜は動産、つまり動く財産です。動産というのはとても便利な商品でもあって、西部劇を見ているとよくわかりますが、牛でも羊でも自分でとっこ歩いてくれる。それを、群れとして歩いていった先で相手に売って、お金や米に替えて帰ってこれる。そういうふうにして社会が成り立っているわけです。殷がなぜ「商」と自称していたかということ、かれらが遊牧民族であり商業民族だったからなんですね。商業は、農耕社会から自立的に出てくるものではありません。

司馬遷の『史記』に話をもどしますと、『史記』の書かれた秦王朝は、農耕を中心とする中央集権社会です。また、『史記』は、漢字で書かれていますから、当然、司馬遷は、甲骨文字のことはまったく知らないわけです。先にも申し上げましたが、甲骨文字は、清王朝末期に羅振玉によって発見され、研究・解説が進んだ。羅振玉が辛亥革命で日本に亡命してからは、甲骨文の研究は京都大学の学者たちの協力を得て、続けられました。だから、日本では甲骨文や金石文の研究が非常に発達しているんですね。その輝かしい成果は、こ

の三部作に吸収されています。

この甲骨文や金石文は、『史記』以前のもので、漢字ではありません。エンゲルスが言うように歴史は記録だということにもどれば、漢字以前、ギリシア文字以前に記録があるのに、歴史の教科書では東洋史でも西洋史でもそれについてちっとも触れていない。それはインチキな歴史なのに、わたしたちはそれ以外の歴史を教わった試しがないんです。だからわたしはこの本を書いたわけです。『史記』以前に甲骨文、金石文があるということは、歴史が殷のさらにその以前にまで、「殷周革命」を介して遡るということです。そのことの解明が、この本の一つのミソです。

## 7 文字の発見で遡る歴史

ヘロドトスは、アルファベット（ギリシア文字）でもって『歴史』を書きましたが、第二次大戦前後にイギリスのエヴァンズという考古学者が、クレタ島でこれより古い文字（クノッソス文書）を発見しました。それが線文字 A、B と呼ばれているものです。線文字 A はまだ解読されていませんが、線文字 B はごく最近、1952 年になってヴェントリスという考古学者とチャドウィックという言語学者によって解読され、それが古いギリシア文字の一種であることが判明しました。チャドウィックの著書『線文字 B の解読』にも書かれていますが、これは本当に驚くべきことでした。

考古学的な発見者であるエヴァンズは、線文字 B を解読することはできなかった。エヴァンズは、楔形文字からの連想でクレタ文字はエジプト文字で、一種の絵文字であろうと考えて、その生涯を終えました。偉大なる学者に多く起こる悲劇がかれにも生じたんです。エヴァンズは、イギリスの考古学者でいちばん偉い人でした。偉い人というのは、学会を牛耳ってしまいますから、だんだん権力者になるんです。かれはクレタ島で文字を発見したので、クレタ島が東地中海文明の中心である、と決めこんでしまった。そして、クレタの文明の歴史に当てはめて、「古代史の暦」をつくってしまったんです。ところが不思議なもので、或るときにはそういう古代史モデルというものはそれなりに説明がつくんです。だからそれでしばらくは行けちゃうわけです。

藤原書店からマーティン・バナールという人が書いた『黒いアテナ』という本が、上下二巻で出ています。これは、わたしのこの三部作の種本の一つになった本ですが、非常によい本ですのでぜひお読みください。バナールは、たいへん優秀な学者ですが、西洋の歴史学者からは排斥されています。なぜかというと、かれは『黒いアテナ』の中で、古典古代ギリシア文明の中心にいたのはエチオピア人であって、エチオピア人は「黒い」と言った。これが白人学者たちの気に障ったんです。

2500 年の歴史を真っ白に塗りつぶしてきて、日本の女の人だってみんな真っ白に化粧している。そこまで長年かけて折角頑張ってきたのに、その大本のギリシア文明の中心が「黒いエチオピア人」だなんて言われたら、せっかくなつくくりあげた偽物の摩天楼がガラガラと

崩れ落ちてしまう。だから必死になってバナールを排斥をするわけです。しかし、エチオピアはコプト教で、それがキリスト教の初期の形態をいちばんよく保存していることは、すでによく知られています。歴史を遡れば、そういうこともどんどんわかってくる。

バナールは「改定古代史モデル表」というのをつくりました。これが西洋の歴史学者にとっては目障りでしかたがない。自分たちがつくった古代史モデル表が完全に覆されてしまうからです。ここ十年くらい「火山学」が非常に発達してきまして、火山学者から新しい資料が出てくる。それによると、トロイ戦争の起こった原因の一つは、火山の爆発だということがわかる。プラトンの書物に出てくる伝説的な大陸「アトランティス」も、じつは実在していて、古代における火山の大噴火によってアトランティス大陸そのものが、プラトンがその所在を記し置いたように無なくなってしまうこともわかってきた。そうすると、バナールの言っていることは明らかなんですね。そういう事実を認めないような歴史学者は、歴史学者という資格はない、とわたしは思います。バナールの「改定古代史モデル表」に即して考えると、ミノア・ミュケーナイ文明は、トロイ戦争を軸にして考えざるを得なくなってくる。今日では真の歴史学は円満具足的にそうした真相を明らかにしてきている。そこでドイツのシュリーマンの話になります。

第一次世界大戦前後のドイツのシュリーマンによるトロイ遺跡の発掘と、第二次世界大戦後のヴェントリスとチャドウィックによる線文字 B の解読によって、今までの西洋史は新しく書き換える必要が出てきました。しかし誰も書き換えてはいません。現にいまだに旧態依然のでたらめな歴史書が通用している。この奇々怪々な現象に、わたしは義憤を感じるものですから、つい言葉を費やしてしまうのですが、今のアカデミズムがわたしの本などを書評するはずがありません。それは、バナールやニーチェが西洋の学会から無視されたのと同じことです。自分たちの商売に差し支えますから。かれらはインチキな歴史を書いて、その原稿料や印税で暮らしているわけですから、ほんとに詐欺みたいなものです。しかし、このことは、歴史学の根本に関することです。

シュリーマンは無学な人でした。企業家として成功してお金を貯めて、五十歳を過ぎてから念願のトロイの発掘を行った。有名な話ですが、かれは少年のころにホメロスの『イリアス』と『オデュッセイア』を読んで感動して、トロイ戦争は本当にあったと信じ、いつかその遺跡を発掘したいものと夢見ていました。わたしも『イリアス』と『オデュッセイア』が好きで、それに関する文献を何冊読んだかわかりませんが、西洋の学者についてわたしが頭にくるのは、『イリアス』と『オデュッセイア』はかれらの歴史にとって大本であるのに、それがトロイ戦争の話だということについて絶対と断言していいくらい触れないことなんです。不思議ですねえ。トロイ戦争はなかったと、ついこのあいだまで言っていました。トロイの遺跡が発掘——それもシュリーマンによって七層も発掘されて日の目を見せると、かれら頑迷固陋な旧学者も不承無承あまりトロイ戦争は無かったとはあまり言わなくなりました。もし、シュリーマンが少年のころの夢を大切に思ってこの発掘をしなかったら、いったい、どうなっていたんでしょうね。

シュリーマンのあともトロイ遺跡の発掘は続いて、じつに七層にわたって遺跡が見つかっています。それによって、戦争で滅んだ街が火山の噴火か何かで埋まってしまって、その上にまた街がつくられて、戦争でまた滅んで、というのを繰り返して、二百年くらいのあいだに七回にわたって世界戦争が続いたことが、確固として証明された。それは地中海世界における世界戦争だったんです。だから、われわれは、地中海世界における世界戦争は、トロイ戦争とペルシア戦争と二回あった、と考えなければならぬと思います。これがヘロドトスのいわゆる「歴史」の始原に横たわっている二つの大事件、大問題です。

第一回目は、トロイ戦争です。これによって東地中海のミノア・ミュケーナイ文明という優れた文明が完膚なきまで滅びました。第二次世界大戦が七回あったようなものですから、どんな文明でも、そりゃあ無くなってしまいますよ。第二回目は、ペルシア大帝国がギリシアに敗れたペルシア戦争です。しかし、マラトンとサラミスではペルシア軍のほんの先遣隊が打ち負かされたにすぎません。そのあとの地中海世界を制覇して、アテネやスパルタなどの諸ポリス国家のそれぞれをうまく操って、ペロポネソス戦争のようなギリシアの内戦を引き起こしたのは、ペルシアです。さらにペルシアは、その内戦でたくさん出てきたギリシア人傭兵を雇って、エジプトを攻略しました。

では、ペルシア帝国はいつ滅びたのか。それは、マケドニアのアレクサンドロス大王の東征によってです。アレクサンドロス大王の東征は、ペルシア帝国との次なる世界戦争でした。アレクサンドロス大王の軍隊は、簡単にペルシア軍を打ち破れたわけではありません。戦いは三回にも及び、それは両軍とも数十万の軍勢を催した大戦争でした。地中海世界の偉大なる支配者だったオリエントのペルシア帝国は、ついにアレクサンドロス大王の前に屈したのです。アテネやスパルタなどは、すでにアレクサンドロスの東征の初陣で血祭りに上げられました。

アレクサンドロス大王の築いたヘレニズム時代は、古代ギリシア文明と古代ローマ帝国のあいだに挟まってサンドウィッチのハムのように譬えられ、薄っぺらな歴史だと論じられてきていましたが、それはとんでもない話で、こちらのほうが大事なんです。ポリス国家を滅ぼし、そしてペルシア帝国をも滅ぼしたマケドニアは、その領土を地中海からオリエントの彼方まで広げた大帝国になり、国際色豊かなヘレニズム文化がそこに花開いたわけです。しかし、マケドニア大帝国は、アレクサンドロス大王の急死とともに、三分解してしまいます。その一つが、古代ローマ帝国になるんです。この古代史の中心的謎を、従来の「高校生向きの歴史教科書」のインチキを突いて、明らかにして記したのも、この三部作の第三巻のミソです。

このように世界史は推移していきます。歴史の個々の小さなエピソードだったら後からいくらでも補充していけばいいんですが、根本的なところで全部インチキなんですから、そこから歴史を総括し直さなければ、二一世紀の世界史の見方を誤る恐れが多分にある。例えばイラク戦争一つとっても、先ずもってイラクという国の由緒が、ブッシュ風情には全くわかっていない。これからイラクがどうなるのかと考えたときに、バグダードも知ら

ない始末です。ブッシュも小泉もそういう無知かつ無恥蒙昧のやからです。メソポタミア文明も知りませんでは、打つ手を間違うに決まっているんです。そういう危機感から、わたしはこの本を書いたわけです。

## 8 ノミナリズムと実存主義

古代ローマ帝国については次回で詳しく触れますが、その前に、プラトンについてお話しします。先ほど近藤節也さんが、「いいだももさんはプラトンがお嫌いなのだ」とおっしゃいましたが、まさにその通りでして、わたしは、プラトンは「古代のスターリン主義者である」といつも意思表示しています。そんなふうに言っているのは戦後ではわたしくらいのもので、それでこれまでずいぶんと孤立をかこっていたのですが（笑）、今では国内外の大多数のまじめな学者は、そう考えはじめているとわたしは思います。たとえば、東大の佐々木毅さんという大学者は、きわめて実証的な大学者でして、別にわたしのようにマルクス主義者でも、ましてや左翼でさえもありませんが、プラトンがいかにインチキな男だったかを、きわめて説得的に書かれています。

どだい「個物」というものを、プラトンはいっさい認めません。何を認めるかという、「アイデア」です。これは認めるものにもない、洞窟に映った影なんですから。日 失ったカゲを見詰めたプラトンは、ソクラテス曰く、と書き出して、十数回にわたって「アイデア」について書きに書いていますが、「アイデア」とは要するにプラトンの頭の中にある妄想です。

中世の終わりに、「オッカムの剃刀」というかたちで「ノミナリズム」というものが出てきました。この考えは、日本ではあまりよく理解されていないのですが、近藤節也さんがおっしゃるように、これは「実在論」に関係する非常に重要な問題で、現在でも論争が続いています。ノミナリズムは「唯名論」と訳されますが、本質、つまりアイデアがあるのではなくて、個々の個物が実在としてあるだけなんだ、という考えです。わたしは、まったくそのとおりだと思います。

わたしは、第二次世界大戦で辛うじて生き延びましたが、戦争が終わって戦後の廢墟の地上に這い上がってみると、ジャン・ポール・サルトルの『嘔吐』という小説が、出てきました。その小説の主人公は、マロニエの木の根っこを見ると吐き気をもよおして、せつかく食ったモノを全部吐いてしまうんです。なぜかという、マロニエの根っこはグロテスクな「個物」です。アイデア的なことで頭がいかれちゃっている人は、個物の力が怖いので、それをアイデアでくるんでしまおうとしますが、わかった気にならなくて何かが一と迫ってくるわけです。それで吐いてしまう。この吐いた経験から、サルトルは有名な『存在と無』を書きました。そこにあるのは「実存は本質に先行する」という命題です。わたしは戦後すぐの二十歳のときにそれを読んで、これだと思いました。本質とかアイデアは存在しないんですよ。実存するのは個物ですから、これが唯一無二なんです。唯一無二なるものから、「アイデア」のような形式的な普遍概念をつくるわけにはいかない。

ヘーゲルは、唯一無二なるものを包括して「具体的普遍」と言いました。「具体的普遍概念」によって、本質に先行する実存と個物を具体的に位置づけることができるようになった。このかんじんな点において、デカルトはだめだと思うんです。デカルトは「身心二元論」ですから。デカルトの「われ思う、故にわれ在り」の近代哲学原理は、一方から言えば、スコラ哲学の「われ在り、故にわれ思う」に戻らなければなりませんし、他方から言えば、今日の現象学が言うように、「かれらに在り、故にわれ在り」の社会的共同体へと出てゆかなければなりません。

このデカルトの「身心二元論」を超えたのが、ライプニッツとスピノザです。このことをわたしは何度も言っているんですが、ヨーロッパ近代哲学史の通説は、みなデカルトから始めますし、わたしの説は、なかなか哲学界の常識にはなりません。

ライプニッツは、宇宙のいたるところが中心である、と言っていますが、まったくそのとおりだとわたしは思います。一中心ではなくて、多中心なんです。ヨーロッパが中心であるとか、漢（中国）が中心であるとかというのは、ぜんぶ嘘です。空回りですよ。それだったら、プラトンの「スターリン主義」と同じことです。一つの中心があると、その他はそこにぜんぶ服属しなければならない。そういうのは、イデアの専制、スターリン主義なんです。そんなことでは、これからの世界はうまく行くはずがありません。第一よくちゃんと見えてこない、世界が。

それから、スピノザですが、スピノザは現在最高の哲学者として再解釈されるにいたっている、といえます。今日、アントニオ・ネグリをはじめとする現代の優れた哲学者たち・思想家たちは、みなスピノザの方を向いています。スピノザは「神の啓示」でいろいろ書いているのですが、『エチカ』を読んでもわかるように、かれの考えでは神様は自然ですから、神の名において語ってはいても、かれが言っていることは「自然」なんです。だから、スピノザ哲学は完全な唯物論です。要するに、自然でもって宇宙論を展開するわけで、ゆえに『エチカ』はとても素晴らしい本です。つまり、多様性の一元論という問題です。

多中心で、多元的で、多様性を許容するということができれば、ヘーゲルの言う「具体的普遍」概念はできないと思います。ですから、先ほど言ったノミナリズム（唯名論）が今でも問題になっている。「ノミナリズム」は、イデアに一元化させるプラトンの考え方とは正反対です。実存＝唯一無二のものは、たくさんあるわけですから、キリスト教的な、一元論的な、カトリック的な普遍概念は成り立ちようがない、と考えます。何だか哲学論争をやっているみたいですが、こういう方法論を発見しないかぎり、これからの世界は絶対に具体化して安定することができないことは、はっきりしています。

もうおわかりだと思いますが、アメリカが中心だとか、スターリンのソ連邦が中心だとか言っていたら、それはイラク戦争にならざるを得ないんです。ドルを中心にして通貨を一つにしようとしたって、そんなことは長期にわたってできっこない。現にユーロができて、人民元ができて、少なくとも世界には今でもすでに通貨が三つある。もうじきドル本位変動相場制も崩壊する、とわたしは思います。そうなったら、管理通貨なき国際通貨



体制は、新しい通貨をつくらなければなりません、今でさえ三つの通貨があるわけですから、円も含めてもっと多極化しますよ。ですから、そこでちゃんとした方法論がなかったら、こんなことの見定めもできないんです。そのためにも「八千年の歴史」を踏まえる必要がある、とわたしは言ってるんです。

## 9 無意識の世界の重要性

わたしはマルクスの徒ですから、書いている方法論は、マルクスの経済学批判とフロイトの精神分析なんです。マルクスは一九世紀の人、フロイトは二〇世紀の人です。わたしは、この二人は最高に偉大な思想家だ、と思っています。それは、社会と人間精神における「無意識の領域」を開拓する方法を、発見・実践して明らかにした人たちだからです。つまり、合理主義文明というのは、氷山の一角でしかないんですよ。氷山というのは見えているのはほんの1パーセントで、あとの99パーセントは水面下にあります。合理主義文明で見えているのは、まさにそれと同じで、ちょこっと水面に出ているところに陽が当たって、ヌースによって見えますから、垂鉛を深く下ろしてもいないのに、世界が全部わかると思っちゃうんです。しかし、垂鉛を深く下ろしてみれば、99パーセントは水面下で見えない。そこにこそ真実が在る。

前回でも触れましたが、メルロ・ポンティエーはわたしたちに『見えるものと見えないもの』を残してくれました。この本を読んで、わたしはかれの遺志を受け継がなければならない、と考えましたが、「見えるもの」というのはこの氷山の一角のことで、ギリシア時代以来見えてきたものなんです。それでもって、西洋中心主義文明をつくってきました。メルロ・ポンティエーは西洋人ですが、かれは「見えないもの」のほうが大事であり、西洋中心主義文明を内側から根本的に転倒させ克服しなければ人類文明はもうこれ以上は生きられない、と考えたわけです。

ついでに、ヴィトゲンシュタインにももう一度触れておきますが、ヴィトゲンシュタインは、或る面では一九世紀末の哲学的思考の特性である「言語論的転換」というものを踏まえた才能ある哲学者で、戦後にヨーロッパで大流行になりましたし、日本ではこれから流行る予感があって新しい「全集」なども出はじめていますし、かれについては実に汗牛充棟の書がありますけれども、わたしに言わせれば二〇世紀の大流行哲学であるヴィトゲンシュタインの論は、全部インチキです。前期に『論理的哲学論考』、後期に『哲学探求』があり、前期と後期ではヴィトゲンシュタインの論理は正反対だとよくいわれてますが、かれが後期で「言語論的大転換」をしたとも思っていたら、それは本当は大間違いです。通説に反して、後期のヴィトゲンシュタインは、完全な「独我論」になります。「我あり」なんですよ。「我あり」もデカルトでもうだめなんですけれども、ヴィトゲンシュタインの場合にはそれがどんどんひどくなって行って、最後にはその「我」もなくなってしまいます。後期のかれは「言語ゲーム論」になり、言語というのはドッジボールの球遊びみたい

なもので、ユース (use)、つまり使うことによって発達するものだ、と定義しましたが、それはたいへん正しいんです。そういう発想は非常にいいんですが、かれの言うドッジボールのコートには、かれ自身はたしかにそこに居るけれども、かれの相手をする人間は絶対に存在していない。相手がこのゲームには出てこない。つまり、一人遊びなんです、だからかれは、最後に論理的破綻を来たしてしまいます。

かれが秘密に書いたラテン語の日記も、翻訳されていて、それを読めばわかりますが、本当にかれは変な男です。ヨーロッパの大金持ちの息子ですから、とにかく世間離れしている。また、わたしにはそういう趣味ではありませんが偏見はないつもりですけど、かれは同性愛者でもあった。朝から晩まで何をやっているかという、妻君がいないから 1 日 3 回くらいせんずりを搔いている。あるいは自分の男相手とやっている。ものすごく性欲旺盛な男でした。世間では正反対に貴公子のように思われていましたけれども。

言語というのは使われることで文脈的な意味が生じてくる。会話することによって文脈ができてきて、意味が通じるようになる。これはソーシャルのいちばん大事な言語論的展開でもありますから、覚えておいておくとういと思いますが、わたしたちは何万年もかけて自分たちの文法を無意識につくってきたわけです。そこで無意識の話にもどりますが、言語というのはみな意識的なものだ、と思っていませんか？ それこそが合理主義文明の氷山の一角しか見ないことであって、それはとんでもない誤りなんです。

わらしたちみな、三歳くらいから言葉を話すようになりますが、それは文法書を読んで覚えたものではなく、母親とのあどけないおしゃべりに始まるユース、会話によって身につけたものです。それは全部、無意識のうちにつくられたものです。つまり、文法の 99 パーセントは無意識なんです。その無意識を言語化することによって文法が現れてくるにすぎないわけです。これは、マルクスが経済学批判でやったこと、フロイトが精神分析でやったことと、同じなんです。

意識のうち 99 パーセントは無意識の領域にある。それを言表して意識化したときに、無意識の構造が法則性を持って現われるということです。合理主義文明のだめなところは、見えている 100 分の 1 にすぎない氷山の一角には法則性があるから、言語意識による科学が成り立つ、と考えているところです。それは正反対だと思ったほうがいい。無意識のほうが大事なんです。

レヴィ・ストロースは、神話を分析することによって、世界のどこであろうと神話というものは同じ構造を持っていることも、発見しました。さらに、それは「親族の構造」と同じであるということも、発見しました。

神話と親族の構造が、無意識の構造として同じ法則性を持って存在している。ですから、合理主義文明では神話が迷信だとされてしまいますが、その意味では神話ほど完全に構造化された法則でできあがっているものはないんです。ですから、「言語論的転換」のあと、つまり「現象学」が始まってからは、わたしたちは社会や人間精神が持っている無意識の領域というものを、そういうものとして受け取っていかなければならない。

そこで、猪野修治さんがこういう読書会という形で討論会をやってくださって気づいたことがあります。普通はこういう本を書いたら、あとはもう講釈すればすむんです。わたしはあまり暇がない人間だから、そうであればなおさら、余計に人の話を聞いたり会話したりする必要もない。しかし、こういう会にわたしが積極的に喜んで参加させていただくのは、自分の本の愛読者がいることを喜びたいのではなくて、もっと学びたいと思っているからです。自分の書いたことについて、人がいろいろと意見を言ってくれるのと聞いていると、自分がそういう意識でもって書いたんじゃないところがわかってくるんです。無責任に書いているということじゃありませんよ。自分で意識して書いていても、無意識の部分は歴大にある。しかし、自分ではそれはわからないんです。だから、わたしの無意識はこの本の 99 倍くらいあることになる (笑)。たいへんですよ、こんなに無意識があるんですから。この超マクラ 本の実に九十九倍です (笑)。

皆さんの話を聞いていると、自分はそういうふうには思っていないで考えたいんだけど、無意識ではそんなふうを考えていたんだ、と気がつく。誰だってそうだと思います。そして、そのことは、新たに言語化された意識法則として定着し、さらに豊かに包括されることがわかる。ですから、あと二回でわたしの無意識の部分も、それなりに明らかになりますよ。それが、わたし自身にとってもとても楽しみなんです。

わたしたちが意識できるのは、ほんの一部です。そして、わからない無意識の部分は、他者との会話によって明らかにされる。ヴィトゲンシュタインがだめなのは、会話を拒否するからなんです。球を投げないんだから。球を投げないでプレイしようなんていったって、そんなもの誰も相手にしませんよ。球は一つでもかまわない。ドッジボールでもサッカーでも、投げ方はいろいろあるんだから、ユースによってさまざまな法則ができる。点が入って勝ち負けが決まる。だから、人生は面白いんじゃないですか。だけど、一人遊びではどうしようにもない。ゲームというものがそもそも相手があつてのことですから。「言語ゲーム」をプレイして事柄を進めていくことを、「言語論的転換」というんです。

## 10 価値転換はこれから始まる

前回も言いましたが、二〇世紀の初めに、エドモンド・フッサールの『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』という本が出ました。西欧哲学の中心にいるフッサールが、ヨーロッパの学問はだめだということ、言ったんですね。わたしたち非ヨーロッパ人は、そういうヨーロッパ人の最新の知覚を尊重すべきです。そして、その危機を超えるためには、現象学的な判断中止 (エポケー) をして、今までのいっさいの既成概念を一度括弧に入れて根元的に考え直さなければならない。それが「超越学的現象学」であると、フッサールは言った。ですから、現代哲学では「超越学的現象学」以外の哲学は、全部ひま人の与太なんです。先に挙げた、バナールの『黒いアテナ』がわからない歴史学が全部与太のと、同じことです。

そう考えると、フッサール、ニーチェ、ソシュールによって提唱された「価値の根本的転換」は始まったばかりですから、これからいよいよ本格的に転換されてゆくと思ったほうがいい。そこで注目しておきたいのは、一つには「ヨーロッパ中心主義」の旧来の誤りです。近藤節也さんをご指摘くださいましたが、バイブル以降のキリスト教文明がヨーロッパ中心主義の大本になっている、ということは、皆さんもご承知のことだと思います。それが古典古代ギリシアのソクラテスープラトンーアリストテレスのインチキ哲学史の贋造とどういふふうにかぶさって、どういふふうに駄目の二乗になってきたのか。

中世ヨーロッパは神学大系で、その前半はアウグスティヌスで、後期はトマス・アクイナスです。アウグスティヌスの『神の国』は、面白くてわたしの愛読書の一つですし、トマス・アクイナスはスコラ哲学者ですから、論理的でとても難かしい。しかし、中世ヨーロッパの歴史や社会の大系は、哲学的にネオ・プラトニズムと習合したんです。つまり、アウグスティヌスの神学というのは、「プラトンーアウグスティヌス神学大系」なんです。これで中世ヨーロッパ世界の前期は統括される。後期は、イスラーム文明の中に保存されていたアリストテレスの学問がルネッサンスによって蘇ります。アリストテレスが復活したあとの神学は、「アリストテレスートマス・アクイナス神学大系」になるんです。

おわかりでしょうか。古典古代ギリシア哲学がプラトンの偽造によって、ミレトスのタレス以来の自然哲学を全部否定してしまった。始原を論じたタレスの「水」という断片は、は非常にいい断片ですよ。もし現在の哲学がミレトスの自然哲学から、プラトンの「ソクラテス曰く」からの体系的贋造によって放逐させられないで、もしまっすぐに今日まで来ていたら、人類文明史は今とはまったく違ったもの、素晴らしいものになっていたでしょう。

もう一つは、「ソフィスト」の哲学です。アテネ・ペリクレス時代の最高の哲学はソフィストの哲学でした。わたしはソフィストについて戦争中、田中美知太郎先生に教わりました。田中美知太郎先生は、日本における古典ギリシア哲学の最高の大家ですが、かれはすでに戦争中に、ギリシア哲学の最高はソフィストである、と喝破しておられます。今もってまったくそのとおりだと、わたしは思います。その証拠に、プラトンとアリストテレスはわざわざソフィスト批判のために、それぞれ一冊づつ本を書いたくらいです。ソフィストはインチキで、かれらはお金を取ってくだらないことを教えている、というわけです。でも、ソフィストはアテネのど真ん中で生徒を教えて暮らしている哲学者ですから、お金を取るのは当たり前なんです。それにケチをつけるプラトンやアリストテレスの方が、よっぽどインチキ学者でオカネを稼ぎまくっていますよ。

三つめは、ヘレニズム時代の、いわゆるプラトン・アリストテレス哲学が滅びたあとの、エピキュロスとストア派とピュロンの三大哲学のことです。このことは、西洋では現在でもあまり教えないわけです。若いころのマルクスが慧眼にもそれに目を付けて大学の学位論文にしましたが、そのときにかれが集めた資料は『マルクス・エンゲルス全集』の第1巻全部を占めるくらい歴大なものです。そこに一八四八革命が起きて、『共産主義宣言』を

書いたマルクスは、そのままその疾風怒涛の渦中に飛び込んで、それからあとはわたしと同じで六十年間席を暖めたことはありませんから、『資本論』は書いたけれども、若い時期に書こうと志したエピクロス・ストア派・ピュロンについては全然まとめていない。そのあとは誰もそのことを書き継いでいませんから、哲学史もその欠陥を惜しむべきですね。

けれども現在では、エピキュロスと、キケロに代表されるストア派と、ピュロンに代表される懐疑派の三つが、偉大な世界哲学の脈絡であることは、明々白々であって、それに比べれば、プラトンやアリストテレスの哲学はなどはほんの片田舎のおっさんの馬鹿話でしかない。この三つの哲学は、現代の心ある哲学者には繋がっているだろう、と思います。わたしのこの本は、若きマルクスの仕残した大哲学的総括の今日の実現のつもりでもあるわけです。

そうすると、〈9.11〉以降の世界を考えざるを得ない。〈9.11〉以降の世界でいちばんの問題は、アメリカ中心からくる偽似普遍性文明に対する、それでは生きていけない世界の民衆の無言の抵抗なんです。先ほどの無意識ということからいうと、それは意識化されているとは限らないけれども、意識化されるなら、それは「アメリカニズム」のようなきわめて寄生的な高度消費文明ではない、深い無意識の法則的な仔細があるんだということが、これから必ずや明らかになるはずです。その一つの言語化された表現というのが、現在における「イスラーム文明の再興」なんです。

どうですか。今の世界を見た場合に、この毎日のぶつかり合いを繙くカギというのは、アメリカニズムとイスラーム文明の相剋であることははっきりしているんじゃないですか。東洋文明、とくに明の「海禁政策」への転換以来の江戸時代の鎖国体制の中で育ってきたわたしたちの、それなり健全な常識から見れば、イスラーム文明でさえもが、やはり「バイブル」に属する一つの異端です。ユダヤ教とカトリックとプロテスタントとイスラームとギリシャ正教は、わたしたち東洋文明の民から見れば、いずれも似たり寄ったり田舎イデオロギーなんです。けれども、イスラームが今、アメリカニズムに対抗する最大の文明原理を持っている。これは国家原理ではありません。「ウンマ」と呼ばれているイスラーム社会には、国境がない。だから、アラブから興ったイスラームは、インドネシアやマレーシアのほうまで広がってきました。そういう「ウンマ共同体」の文明が、アメリカニズムという怪奇なドル・核帝国と対立関係にあるわけです。社会主義諸国の方は、スターリ主義政権のソヴェト・ロシアが一九九一年に崩壊してから以後は、歴史から退場してしまっただけです。

このことの歴史的意味は、今まで縷々お話してきたような世界史観を持たなければ絶対にわかりません。わたしは、イスラーム文明の人ときちんと話したことはありませんが、そういう世界史観についての了解がありますから、それなりにその今日的意義についてわかりますし、とりわけ〈9・11〉事件以後の今日では、臨場感をもってよくわかるころがあります。「アメリカニズム批判」と「スターリニズム批判」という点では、完全に意見が一致するだろうと思います。

わたしは、今年中にはアメリカがイラクから撤退し、再来年あたりにドル本位変動相場制が世界史的に崩壊すると予想していますが、日本でも集団自衛権の是非と憲法 9 条が問われ、小泉首相も花道に出ないで終わることがはっきりしていて、心からご同情にも堪えません（笑）。しかしこれは継続審議の法案ですから、またポスト小泉の国会に「国民投票法案」や「共謀罪法案」も出てきます。わたしは、日本国憲法第九条については絶対死守でやってきましたが、NHKテレビの毎日の「百歳の男女特集」で百歳の方が頑張って自転車なんかを漕いでいるのを見ますと、八十二歳のわたしも、もっと頑張ってみようと、決心を固め直すわけです。

これからの世界は、非常に面白くなると思いますが、自分たちの世界史観がなければ、何が面白いのかもわからないし、何を選択していいのかもわからない。わたしはそれを知るために、皆さんにお世話になって、こうして懇談会に来させていただいております。ということをお申しあげまして、今日は終わりにしたいと思います。どうも長時間ありがとうございました。

## 総合討論

猪野修治 時間の関係で、最初にまとめて質問をしていただきたい、と思います。どなたか発言されたい方がいらっしゃれば、お願いいたします。

宇佐美義尚 宇佐美と申します。いいださんにお聞きしたいのは、この『〈主体〉の世界遍歴』という書名についてです。よく「思想の遍歴」という言葉は使いますが、あえて「世界の遍歴」とした意味を説明してほしいのですが。

勝木渥 勝木と申します。いいださんとは 1964 年の秋か 65 年の 5 月か、名古屋大学の文化祭で小説家ならぬ「大説家いいだもも来る」という講演があったときに、野次馬で聞きに行き、お目にかかったことがあります。そのころぼくは、日本の戦後朝鮮戦争の問題として、朝鮮戦争に思いをいたしており、「定職について物理で飯が食えるようになってから、ときにビフテキを食べることもできるようになったが、そのときビフテキから流れ出てくる血は、朝鮮戦争で流された朝鮮人民の血であり、その肉は韓国民衆の肉である」などと思ってましたので、そのことを言いましたら、いいださんが「これはいいや。それいただき」とおっしゃった（笑）のを、覚えています。

もう一つ思い出すのは、ちょうどそのころコンピューターが入りかけて、最初は穴を空けたテープでデータを読み込ませることをやっていたので、ぼくはこれは高速ソロバンくらいに思っていたんです。そのとき確かいいださんが、コンピューターというのはどういふものなんだ、と言われましたので、自分の経験から、あれは高速ソロバンであって大したことはないと言っちゃったんですが、これは完全にぼくの予測が外れました。

さきほどのお話で、ぼくが興味深かったのは、「万里の長城」の外側は牧畜で、動き回る馬や牛なんかは主役で、内側は植物だったということなんです。ぼくは今、エントロピー的な生命環境論というのを、考えています。地球には重力が働いていて、上から下へ養分は流れ落ちてきますから、もう 1 回循環が成り立つためには、下から上へ持ち上げなくてはならない。

そういう役割を、水は太陽が持ち上げてくれるわけですが、養分を持ち上げるのは動物なんです。牧畜の基礎となっている動物と、農耕の基礎となっている植物を比べますと、植物のほうは根を大地にはやして養分をとりますが、動物のほうは大地に相当するものを消化器として、自分の体に取り込んだから、自由に動き回ることができる。そういう特質を生かして、積極的に生態系に寄与しているはずだ、と思いました。

しかし、中学で習う食物連鎖の三角形で、植物は生産者、微生物は分解者、動物は消費者と位置づけられています。では、動物は生態系に何ら積極的な寄与をしていないのか。そうではなくて、養分の循環を成り立たせるためには、低いところから高いところに持ち

上げなくてはならないわけですから、動物は物を運ぶという積極的な役を果たしているはずで、そういう動物の特性を生かした物質循環の三角形をきちんを考えなくてはならないのではないかと思っているものですから、非常に興味深くお聞きしました。

清水邦男　横須賀市から来ました清水と申します。フランスに長く住んでいました。政治・経済を中心とする国際関係の動きを主たる関心事とするジャーナリストですが、個人的な体験としても、フランス人との接触のなかで、いわゆるカルチャー・ショックを強く感じました。人間関係で、ふつう日本人同士なら予想される相手の出方や反応とまったく違うフランス人の反応と出会い、その理由がわからない、理解できないという経験です。はじめは個人的な人種差別とか好悪の感情かと思っていたのですが、そうではなくて、どんなフランス人にも共通するもので、日本人には理解できない反応に出会ったのです。

やがて、自分がフランス人の反応を理解できないのは、フランス人がおかしいのではなく、フランス人とは異なった人間関係のあり方のなかで、自分（日本人）が生きて来て、フランス人も同じだと思いこんでいたから、フランス人の反応に違和感を覚えたのだ、と気付いたのです。西欧と日本との文明的相違についての書物はたくさんありますが、住んでいる人々の毎日の生活感情に、どのような形で染みこんでいるかは、実際に異文化の国に住んで見ないと、その違いは体感できません。

逆に、体験的に違いを感じても、その違いとはいったい何であるのか、どこがどう違うのかを明確に概念化することは、とても困難です。それで、たいへん苦勞しました。ようやく自分なりの結論を出しましたが、世界史的な歴史的な知識が貧困なため、いまひとつ、明確にならない不満がありました。西洋文明の起源についての先生の極めて遠大なる歴史の話の伺って、非常に知的にすっきりさせていただいた気持であり、大変ありがとうございました。

わたしがフランスでの生活で得た西洋文明についての自分なりの結論とは、一言でいえば、西欧（フランス）社会とは「理性の優位」という原理で構築されている社会だ、ということを知ったことです。「理性の優位」という西洋の価値観に、なぜ、わたしが強いカルチャー・ショックを受けたのかを考えていくうちに、それは日本人の社会が西洋とは全く正反対の方向性を持つ原理、つまり「情緒性の優位」で構築されており、そういう価値観で自分が生きてきたことに気付いたのです。

「理性の優位」の価値観と「情緒性の優位」の価値観とが、正反対の方向性を持っているということは、頭で理解するだけなら問題は起きませんが、現実には、欧米社会に暮らすとなると、たいへんな問題が起きます。自分のなかの体内時計（日本人の価値観）と実際に生活している空間（フランス）の時計が食い違っているようなものです。違いをはっきり理解して入れればよいのですが、自分の価値観（体内時計）がどういうシステムなのかふつうは意識していませんから、時計の食い違いが理解できないのです。これがカルチャー・ショックです。



外国に住んでいても、外交官のように特権的な環境の中で暮らしていたのでは、衝突は起きにくいので、価値観の相違、カルチャー・ショックを体験しないまま過ごしてしまうこともあります。あるいは、日本レストランやカラオケバーなど日本的な雰囲気の中に逃げ込んでしまうこともあります。最近では、世界中どこに行っても、日本の環境を見つけやすいのでなおさらです。

西欧社会での「理性の優位」というのは、現実には毎日の生活の中に生きているオキテ（掟）であり、観念的な知識ではないのです。「理性の優位」とは言い換えれば、「情緒性への軽蔑」という形であられます。言い方を変えれば、「情緒性は恋人、家族、友人」というプライベートのなかでだけ優位を認められていますが、社会的には公的にはあくまで「理性の優位」なのです。これがわからないと、西欧社会に於けるプライベートの重要性を理解できません。見知らぬ人や社会的公的な場で、「私の気持ちを察してください」という態度は、軽蔑されてしまうのです。わたしは、なんだか、そのような苦い経験を味わわされるなかで、ようやく、自分のなかでは（日本社会では）「相手の気持ちを察すること」がもっとも重要なこと、時には法律よりも大事だという「ものの考え方」（価値観）で生きてきたことに、気付いたのです。

日常生活はもちろん、わたしがジャーナリストとして接しているフランスの政治家、言論人、つまり政府や言論界、経済界という現実の社会を動かしている人たちは、本当に徹底しています。それは潜在意識にまで浸透しているので、普段はあまり意識されていません。それは当然のこととして、潜在意識の奥底にまでしみこんでいますので、それと方向性が逆向きの社会的な情緒性の重要性をいくら指摘しても、結局は理解されないのです。

「情緒性の優位」はあくまでプライベートのなかでのことであり、社会的には「理性の優位」、つまり「法の支配」であるべきだ、と考えるのです。この西欧文明の根本的性格が構築されてきた歴史的背景が、先生のお話で理解できたと思ったのです。

日本についていいますと、西洋社会とはまったく逆で、「情緒性の優位」がいかにも日本社会で根を張っているか、特に政治・経済、言論界も含めていえるのです。これは、まさに西洋社会では、「理性の優位」が無意識的にすべての前提に立って判断されているのと同じように、日本では「情緒性の優位」が潜在意識の奥深くにまで浸透しています。それが時によって、立ちはだかってくるのです。日本では理性的な原理原則が必要だ、とよく言われますが、結局は「理屈はさておき丸く収めよう」という潜在意識の中の大原則が出てきて、現実の社会を律してしまいがちです。

西洋の「理性の優位」の持つ欠陥というのは、先生が先ほどご指摘されたとおりであります。欧米人たちも自分たちの価値観には欠陥があることを自覚して修正しようと苦しんでいます。解決策は、情緒性をプライベートのなかに閉じこめなくて、社会的連帯に導入することなのですが、それは「理性の優位」「法の支配」という大原則を破壊すると、かれらは恐れるのです。日本社会では、「理屈はさておき丸く収めるべし」という道義的権威に抵抗することは、なかなかむづかしい。

これが「なれあい」や談合を生み出します。これはまさに日本社会における「情緒性の優位」が持つ欠陥です。小泉首相はその「丸く収める」という自民党的体質を壊そうとしたんだと思います。先生は小泉批判をされてましたけれど、わたしはその意味での彼の価値があったと思います。

この日本文化における、あるいは非西洋文明における（これにはイスラムも入ると思うんですが）ネガティブな側面についてどうお考えか、お聞きしたいと思います。

猪野修治　それでは、ひとまずいいださんに、3名の方々の質問にそれぞれ答えていただきます。どうぞ、よろしく御願います。

いいだもも　先ほどの休憩時間に宇佐美さんに名刺をいただいたんですが、それには「亜細亜大学経済学部の助教授」とありまして、経済学の先生を目の前にして経済の話をしたわけですからたいへん恐縮してしまいましたが、それはさておき、『(主体)の世界遍歴(ユリシーズ)』という書名の含意、由来について、お答えいたします。わたしにとってそれは非常に大事なことです。わたしは、ジェイムス・ジョイスとフランツ・カフカが現代文学における偉大な作家だと思っています。かれらが詩的言語批評でもって何を表現しようとしたのかは、20世紀の最大の文学的課題ですが、「ユリシーズ」というのはそこにあるんです。

ご存知のように、「ユリシーズ」というのはホメロスの『オデュッセイア』に出てくるギリシア伝説の英雄オデュッセウスのことですが、オデュッセウス自身がどうして人間の或る典型的な規範なのか、と考えてみますと、これは口承の英雄叙事詩ですから、ホメロスが属している地中海世界の共同体社会全体についての叙事詩なわけです。見てきたように書いていますけれども、それはわたしの取材しているホメロス時代の最大の人間類型、批判的な人間類型の造形であろうと、思います。いわゆるホメロスの属していた共同体を統合している根本的な価値なんですね。その価値をヘロス、英雄、ヒーローというものに人間形象化しながら、ホメロスは倦まず弛まず語っています。

地中海世界というのは、ご承知のように雨があまり降らないところですから、共同体に暮らす人々は、夕方になると軒先に出てきて、そこでおしゃべりを楽しまします。そのときに、「ホメーライ」と呼ばれているホメロスの吟遊詩人集団が必ずいて、その共同体の物語として飽きずに『オデュッセイア』を語ったんですね。人々がそれをどう受け取るかで、その後の文明のすべての下地が用意されるわけです。

『オデュッセイア』も『イリアス』も、トロイ戦争の話です。トロイ戦争は先ほど申し上げましたように、シュリーマンの発掘以来、7層まで発見されています。これから先は、わたしの想像ですが、約200年間にわたって7回の世界戦争があった。広島型原爆が7回落とされたというくらいに想像すればだいたいわかる、と思います。それによって、貢納制母系社会であった偉大なるミノア・ミュケーナイ文明が滅びたわけです。それがわたしのこの3巻本の主題中の主題になっています。

オデュッセウスはイタケーの王様で、トロイ戦争に従軍したわけですが、非常な知恵者で、皆さんご存知の「トロイの木馬」の詭計で、難航不落だったトロイを内側からは破壊して、アガ멤ノン指揮のギリシア軍を勝利へと導いた。トロイがなかなか落ちないので、知恵者のオデュッセウスが、木馬（神馬）を発案して、その城壁の前に置いたわけですが、トロイのほうも 200 年にわたってギリシアの侵入を防いできた強者ですから、何か計りごとがあるんじゃないかと思って、なかなか木馬に近寄らなかった。しかし、ギリシアの神馬を城内に鎮座させないことには必ず呪いがあるだろうと考えて、とうとうオデュッセウスの策略に引っかかってしまって、木馬を城内に引き入れてしまった。呪いというのは、先ほど申し上げた占いと同じで、古代の共同体社会では第一の政治思想的選択原理です。ところがよくよくご存知のように、その木馬の中には、百数十人のギリシア軍の精鋭が隠れていて、そのため堅牢を誇った城壁は内側から破壊され、とうとうトロイは落城します。

トロイ戦争に勝って、オデュッセウスは、帰国の途につきます。イタケーでは妻ペネロペが待ち詫びていますが、オデュッセウスの留守中に国は無秩序となり、たくさんの男たちがかのじょを自分のものにしようと、ありとあらゆる手練手管を弄していた。そのことをオデュッセウスも知っており、だから帰路を急ぎますが、そこで思いがけない世界遍歴に巻き込まれてしまいます。つまり、『オデュッセイア』は世界遍歴の物語であると同時に、世界戦争からの凱旋帰還の物語なんです。それはかれ個人の運命ではなくて、トロイ戦争にはあらゆる共同体から将兵が出征していましたから、かれらが皆同じ運命を背負っていた。全員が帰還を果たそうとしていて、それが当時の 200 年間の歴史の主題でした。それを経過しなければ、ミノア・ミューケーナイ文明が、そのあとの古典古代ギリシア文明に世界史的に移行することはなかった。それは、必至の歴史的過渡期であり、歴史の媒介物であったわけです。そういう意味でオデュッセウスの世界遍歴の物語には普遍性がある、と言えると思います。

ですから、オデュッセウス（ユリシーズ）の物語のポイントは、三つあります。ひとつには、普遍的な時代の課題（凱旋帰還物語）であったことです。二つ目は、古代地中海世界（貢納制母系社会）が古典古代ギリシア文明（奴隷制社会のポリス国家）に移行する過渡期の物語であったこと、つまりオリエントからオクシデントへの世界史転換の物語であるということです。三つ目には、世界遍歴を通してオデュッセウス（英雄）が個性を持つにいたったことです。

その三つによって、現代のわたしたちは、かけがえのない個性（実存）を持つようになった。人類文明史の原点でこの三つの問題が、社会的、共同体的、個人的に出されて、その典型的人物として「オデュッセウス」が生まれて、その人物像が世界遍歴を通して造形されていく、ということなんだと思います。オデュッセウスと歩を共にした仲間たちは、遍歴の中ですべて死んでしまいます。オデュッセウスただ一人が奇跡的に生還する。ですから、時代の戦争から生き残った者が、それから後の時代の主人公の原型をつくった、と言えるわけです。

そこで、なぜわたしがこの本に『〈主体〉の世界遍歴』という題名をつけたのかということです。二一世紀に向かう今日は特にそうですが、現代資本主義システムにおいては、高度消費文明を軸にして人間が意識を完全に剥奪され、それによって人間の〈主体〉はなくなってしまった。日本の今日における、総評民同運動が全面崩壊した後に「連合」組合運動がとってかわってからの、労働者運動の低落などは、そのささやかな一例にしかすぎません。これだけの世界的な文明の危機があるにもかかわらず、それを超えるような抵抗は、今のところイスラーム文明以外からは出ていないことに、わたしは危機感を覚えます。つまり、現代の世界的危機の核心は〈主体〉の危機である、と言っているんです。現代マルクス主義者として、わたしはずっとこのことを唱え続けていますが、最近ではやっとな若い人たちの中にも賛同者が増えまして、わたしどもの政治グループの機関誌（『未来』）も出るようになりました。

世界史的危機の核心は、外側の物象的危機ではなくて、内側の〈主体〉自体の意識の剥奪からくる危機なんだということです。人々が無関心なのは、そこからきているんです。だから、わたし自身は〈主体〉の危機をきわめて深刻にとらえています。〈主体〉の危機は、現在の南北問題に通ずる南との連帯の問題とイラク戦争における反戦の問題で、「マルティチュード」と呼ばれている、全世界で1000万人を超えるような〈主体〉の再生が、ようやくここ四、五年で三十年ぶりに端緒につき始めた、という時代認識でいます。

日本は欧米よりもひと回り〈主体〉の再生状況は遅れています。例えば、わたしが労働組合運動などで関知しているのは、関西の労働組合運動の主要部隊で「関マナ」という関西生コン労働組合です。そこにわたしの三十年来の同志である武健一という組合委員長がいて、そのかれは昨年、1年2ヶ月にわたって権力による不当逮捕と収監在獄したらい回しを続けられて、最近やっとな釈放をかちとったばかりですけれども、例えばわたしたちは、「共謀罪法案」の国会通過を阻止するために、このあいだも国会で連日座り込みをやりましたが、そういうときには、東京労働組合などからは当時は最初は一人も国会前に出てこない。驚くべき〈主体〉の危機なんですよ。大阪の生コンからは、毎日10名ずつ交代でやってきましたが、そのうちにだんだん他の労働組合が合流して、最後は500名の座り込みになり、全国的な反対運動が盛り上がってきて、「共謀罪法案」を潰して継続審議へ移してしまうことができた。この運動成果によって関西の労働組合運動はこれからますます元気になるだろうと思いますが、逆にわたしはその部分の自覚も含めてますます〈主体〉の危機の深化確信を深めています。

このように〈主体〉の危機が今日の日本の岐路の核心にあるので、〈主体〉を再生することが今日なにより非常に肝心なんです。それは必ずインターナショナルに再生されなければだめなんであって、世界遍歴の中で再生される以外に方法はないんです。イタリアに、スピノザの『エチカ』をマスターした人で、わたしの同志でもあるアントニオ・ネグリという人がいます。わたしと歳が同じで、経歴も一緒です。獄中から立候補して国会議員になりましたが、もともとはわたしと同じように、「赤い旅団」の活動家でした。かれのよう

な人たちの中にあるハードな思想というのは、世界遍歴から出てくるのであって、いま無意識にさまざまに蠢動しはじめている〈主体〉というのは、先ほどの意識と無意識の論理でいうと、必ずわたしたちのそういう活動を媒介にして、言語意識化されます。言語意識化されれば、たちまち100倍、1000倍にパワーアップするにちがいありません。

そういう展望のもとに、この本のタイトルに「主体のユリシーズ」を付けているわけです。それは、世界戦争危機から発している〈主体〉の遍歴によって、個性のある英雄が社会的に大量に生まれる、ということの比喩と言えます。このあとイラク戦争が終われば、マルティチュードというものの再生は、〈主体〉の遍歴として急速に活性化するであろう、と思います。近頃わたしの唱えている〈反転攻勢〉への転換に近い、という格言の根拠です。

二番目のご質問ですが、名古屋大学で1964年の秋か65年の5月かにお会いした方と、またこうしてお目にかかれるなんて、こういう会をやっているこその感無量なものがありますが、これもわたしの概念でいえば、世界遍歴です。

勝木さんが朝鮮戦争のことをおっしゃいましたが、戦後の日本社会は再建され、膨張して世界的な企業社会になり、高度経済成長の実現以来、わたしたちの生活もそれなりに潤っている。そのなかでわれわれが忘れてはならない問題は、日本は朝鮮戦争にアメリカの朝鮮・分割の戦争に間接荷担したことによって、アメリカのドル戦費のほとんどをせしめることができ、そのことが日本の資本主義が戦後の疲弊から復活した最大のきっかけになったということです。

のちにわたしたちはが「ベ平連」をつくったときに、小田実くんが文学者として非常に鋭敏に形象化した概念ですが、わたしたちの持つべき反戦平和意識というのは、「被害者平和主義」ではなくて、「加害者平和主義」である、ということを確認しました。現在の共産党代々木派をはじめとして、日本の反戦平和意識はことごとく「被害者平和主義」です。「被害者平和主義」というのは、第2次世界大戦で負けたという国民経験に根差していますから、情緒的で俚耳に入りやすい。だから「被害者平和主義者」は、戦争の被害に遭わないためには、戦争に巻き込まれないにかぎる、と言うわけです。しかし、自分のほうが中国に侵略しているじゃないか、ヴェトナム戦争に間接荷担しているじゃないか、イラク戦争でサマワに行っているじゃないか。そういうことについては、まったく無関心、無反省で、自分だけが戦争で儲けることだけを、あるいはまた損をしてしまう戦争からは逃亡することだけを考えているわけです。こんなものは、わたしは本当の意味での反戦平和主義だとは思いません。それどころかそんなものは、本当の反戦平和意識の足を引っばる最悪の民族主義的な内的な腐敗の産物にすぎないと思います。

日本の戦後の反戦主義者が朝鮮戦争からどういう教訓を引き出したのか。これは現在でも解決していないから、「歴史問題」になっているわけです。こういう問題は、徹底的な思想的反省がないかぎりには、解決しっこないんです。その中でわれわれは、朝鮮戦争が金日成側からの南進によって始まったという事実も知らなければなりません。金日成のあとは

金正日と、親子で国を支配する家父長的な封建制そのものの国家ですが、そんな「社会主義」なんてありえません。あれは家産制国家で独裁君主が継続していく王朝国家なわけですから、そんなものは地球上の癌ですから、早くなくなっただけがいいに決まっています。だけど現実にあるわけですから、あくまでも北朝鮮の人びとの自主的な再生に依拠して、金正日政権が暴発しないようにして社会変化させないといけないですね。

北朝鮮に拉致されて死んでしまったことが明らかな娘の両親が毎回毎回もテレビに出てきますが、その方たちは気の毒だけれども、或る意味かれらは安倍晋三なんかよりももっとファシストですよ。そういう人たちがテレビを占領しているという事態は由々しいことです。それは、かれらが気の毒だということとはまったく別次元の問題です。ですから、わたしはかれらに同情を惜しみませんが、同時にかれらが超ファシストだということの批判もやめるつもりはありません。

かれらの言動を、韓国の人たしも迷惑がっています。韓国に押しかけていっても、韓国の大統領や首相は、面会しようとしません。それはなぜかという、かれらが娘は生きているはずだと主張することをタネにして、自分たちの我意をショウ・アップしようとしている。まさにウソからでたマコトのやり口なんです。今度は、「その夫といわれているという人物」が出てくるわけです。そういうバカバカしい言い方自体が、テレビ放映でも平気でまかり通っているのは、〈主体〉の危機の最たるものだとわたしは思っています。お孫さんだつて、そんなおじいちゃん、おばちゃんと一緒に暮らしたいとはつゆ思わないですよ。そりゃあ北朝鮮はひどい国ですけれども、それでも向こうにいたほうがいい、と思っているから出てこない。「めぐみ」ちゃんが自殺してしまっただけで生きていないことは、かのじよの御亭主やかのじよの娘さんには分り切ったことなわけですからね。それがイヤイヤ、必ず生きている、それを一日も早く取り戻さなければならない、というのがウルトラ・ファシストとして毎日テレビに登場してくる「めぐみ」の父母の政治資産を支えている唯一のインチなタネなのですから。

直接お孫さんと娘の御亭主にインタビューをしてみれば、本当のことはすぐわかるはずです。それがいやだから、あのウルトラ・ファシストの両親にかんじんな娘の御ご本人やお孫さんのところに、今にして行こうとは絶対にしない。

そここのところをどう乗り越えることができるかは、インターナショナルな世界遍歴を通す以外にはないと思います。ナショナリズムに集約されるような自分の個人体験で、夜郎自大的になって、めくら檻のようなことを、いつまでもやっつけてはしようもない。ですから、わたしの言う〈主体〉の遍歴というのは、そんなに高尚なことではなくて、日々の生活の中に現われてくるんです。そういうことについてまったく無関心な人たちがいて、マスコミもそれを平気でキャンペーンして、片棒を担いでいるという意識さえもないのは、わたしから見れば意識を剥奪されているということなわけですから。

それから、勝木さんがエントロピー的な観点から生態系環境を再検討するとおっしゃいましたが、なるほどと思いました。物質循環という点に着目しながら、世界を宇宙論的に

構築するためには、雨が降るといふことを考慮しなければなりません。上から下へ、下から上への循環といふことです。現在の常識では、地上の生産と生活で排出されたいろいろな汚物は、海の水蒸気とともに上にあがって行って、亜成層圏でドカーンという音がして全部清浄化されるといふことがわかっています。これがまた雨になって降ってくる。そうやって循環している。しかし、勝木さんがおっしゃっているように、養分は水のように下から上には自然もままではあがらない。それは勝木さんがおっしゃるように、動物が自分の養分を大地から摂取して歩き回ることによって養分の循環が成り立っている。そういう物質循環を包括的に明らかにすることがぜひ必要だと思ひます。それは地球論、ひいては宇宙論のわたしたち自身による自己形成の問題だと思ひます。勝木さんの研鑽作業に期待しています。

三番目のご質問ですが、清水さんとお会いするは、今日で2回目になります。個人的なことですが、わたしの妹が最近亡くなりまして、葬儀に行きましたら、そこで、清水邦男さんにお会いしたんです。妹は浜松の清水という人のところへ嫁いだんですが、その人の従兄弟にあたる方が清水邦男さんでした。そのときに、この会のことをご案内申し上げましたら、さっそくいらしてくださいました、というわけです。ありがたい次第です。

清水さんのカルチャー・ショックの根元でもある西洋合理主義文明といふものの相対化と限界性についてのご発言は、その裏側にあるわたしたちにとって、非常に大事な問題を出されておられて、たいへん興味深いものでした。わたしの本の中でも繰り返し書いておりますが、西洋中心の合理主義文明がだめだといふことは、古典古代ギリシア文明を見てもはっきりしています。一つの中心でもって文明史を考えると、世界は崩壊する、といふことです。わたしたちは、それをぜひとも相対化しなければならない。

ヨーロッパの学者で、マルクスとともに偉いのはマックス・ウェーバーだと思ひますが、ウェーバーの概念といふのは「世界合理化」の論理です。かれは西洋文明のトップにいた人ですから、そういう論を導き出すのは当然なんです、その考えではうまく行かなくなったといふのが、二〇世紀的現代の最大の問題なんです。そのことを、かれマックス・ウェーバーは自覚して死んでいったんですね。

ウェーバーは、わたしの本に匹敵するくらいのスケールで、宗教倫理でもって世界史を再構成しました。「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」はどこから起きたのかといふことの世界史的経過をはっきりさせたことについては、わたしにとっても学ぶところが非常に多いのですが、やはりかれにもあまり時間がなくて、わたしが言っているゾロアスター教まで行かないで、キリスト教とユダヤ教のところで終わってしまいました。ユダヤ教の問題は、キリスト教を考えるうえでも大事なことです、それ以前のことがわからないと、ユダヤ教を相対化することはできません。

ウェーバーの限界も関係してきますが、かれ自身が最後に到達したのは、驚くべきことに、世界合理化がもたらしたペシミズムなんです。「合理化の檻」といふことが、かれの今日の西洋文明の運命についての最終規定です。つまり、現代文明は世界合理化によって自

ら檻をつくって、その檻の中に閉じこめられて出られなくなってしまった。これで人類文明は終わりであろう、とウェーバーは予感したんです。それにともなってもう一つ、かれが予感したのは、ヒトラーの出現です。これはウェーバーには全く責任はありませんが、まさにヒトラーの出現によって、ヨーロッパはかれの心配したとおりの世界になってしまいました。

そういうことを考えると、西洋合理主義文明の問題点は、一つには清水さんがおっしゃったように、情緒の欠落の問題です。もう一つは、われわれの得意とする実践の問題です。意識化されている合理的意識だけでは世の中は裁ききれない。1パーセントの合理的意識だけでさばこうとすると、あと99パーセントの無意識の領域では間違うわけですから。そこが非常に大事なところですよ。

逆に日本の場合、特に明治維新以降に近代大国仲間入りしてから、われわれが非常に苦労したのは、清水さんがおっしゃったように、ものごとを情緒で一面化しすぎることです。わたしが子供のころに苦しんだ命題というのは、「理屈のクツは履けない」というものでした。子供というのは疑問の固まりですから、何で、何で、といつも質問します。あるとき両親に、道をどんどん行くと果てはあるのか、その果てを行くとどうなるのか、としつこく訊いたら、うるさいって叱るわけですね。それで最後には、「理屈のクツは履けない」って言うんです（笑）。クツは履くんですよ。理屈がなかったら歩けないんです。要するに、理屈を立ててはいかん、情緒だということなんです。それはないですよ。封建制以前の問題です。こんなことを言っていたら、何事も成り立たちません。理屈は立てなければならぬんです。つまり、概念があるかどうか、ということですね。

概念は分割です。日本人は情緒的な一体化が好きですから、分割をいやがってしないわけですが、分割をしなければ、男も女もないし、牧畜と農業も分けられないし、東と西もないんです。ですから、概念分割のないような話は、全部インチキです。情緒でもっててもやもやとさせてごまかそうとするわけです。この問題を超えなければ、わたしたちは、現代の普遍的人間にはなれません。人と会話することだってできません。2+2は西洋合理主義のインチキです、というようなわけには絶対にゆかない。これが近代化された日本の裏側にある問題です。わたしたちが近代化に、また、西洋文明に惹かれるのは、そこからくるんですね。2+2=4だと納得してもらわないと困る、ということもあるんです。情緒主義は古い日本人の悪いところであって、新しい日本人はそういうところを引きずってはいけぬ、と思います。

清水さんが、長いフランス生活の経験を裏打ちになさって、この面の合理主義と情緒主義の相互限界の問題を、過不足なくまとめてご発言くださったので、本日の議論は最終的にみごとなオチがついた、とわたしは思っています。

だいぶ長引いてしまいましたが、今日はこれで終わりにいたします。どうもありがとうございました。